

I 生涯

(1)

シモーヌ・ウエーユは一九〇九年、パリの裕福なユダヤ人医師の家に生まれた。家庭は極めて暖かい雰囲気にも包まれていたが、どうしたものか、彼女は子供の頃から人間の悲しみとか苦しみに敏感に反応し、また妙な挫折感に襲われることが多かった。その一例として、まだほんの子供の頃、兄の背負う重い荷物に較べあまりに自分の荷物が軽いのを見て雪の中にかがみこんだまま、だだをこねて動こうとしなかったという話があり、また一九一四年、第一次世界大戦が始まったとき、五歳になったばかりの彼女は戦線の兵隊さんには砂糖がないということを知り、自分も砂糖に手をつけなかったという話もある。さらに、その直後には、労働者の子供が靴下をはいていないので、自分も靴下をぬいでしまったとも伝えられている。「子供の頃からわたしの心の奥底にはキリスト教的な隣人愛の気持がいつも働いていたようです」とウエーユがその自伝的な書簡で書いているのは、まさにこうした幼年時代のことを思い出していることであろう。

しかし、彼女は他人の悲惨に責められるばかりでなく、自分の肉体的な苦しみにも生涯さいなまれねばならなかった。十二歳の頃から持病となった間歇竇炎（カウチン）という病名の頭痛は年をとるに従って

ますます激しさを増し、二十歳を越した頃からはティボンの叙言にもある通り「気づかないうちに死んで地獄に落ちていくのかと思う」ほどひどいものになった。

(1) 『神を待ち望む』六四頁

苦しみはそればかりではすまなかった。というのは子供のときに受けた挫折感が生涯シモーヌ・ウェーユにつきまとった。彼女には三つ年上の兄アンドレ・ウェーユがいた。この人は今日世界的に有名な数学者としてアメリカで活躍しているが、シモーヌはこの兄の天分に對してひどい劣等感を持っていた。彼女がまだ子供の頃、たまたま来て来た客がお世辞の積りでアンドレに「こちらさんはおつむがよくて」と言い、シモーヌには「こちらさんはお美しい」といったのが、ひどいショックだったらしい。彼女にしてみれば「こちらさんもおつむがよくて」といってもらいたかったのだろう。こうしたコンプレックスはその後ますます嵩じて、ついに十四歳の頃には「真理を究める能力のないものは死んだ方がよい」とまで考えるほどになり、悶々として数カ月を送った。しかし、そのあげく、たとえ才能がなくとも全身全霊をあげて努力し、真理を受け入れるにふさわしい状態になるまで必死に励むならば、やがてはだれも真理の国に到達することができる、という一種の悟りをうるに至ったという。

シモーヌ・ウェーユにはもう一つ極端な性質があった。それはほんのわずかな不潔にも耐えられないという性質である。これも子供の頃の話であるが、細菌学者として有名でありウェーユ家の古いつき合いだったメチニコフの家へ両親が彼女を連れて訪れたときのことである。ウェーユがいかに可愛らしいので、思わずメチニコフが彼女の手に口づけしたところ、彼女は急にワッと泣き出して「お水、お水、手を洗うお水を頂戴」と叫び廻ったということである。ウェーユは大人になっ

てからもキッスだの抱擁だの、外人がよくやる近親間の愛情の表現さえいやらしく感じた。彼女がそうした暖かい、なぐさめとなる一切のものを断乎として拒否したのは、一面においてこうした強い潔癖から来ていたのかもしれないし、またそれが彼女の孤独感をいっそう深めたことにもなるのである。――わたしは孤独でいるよう――例外なくだれからも隔離され、どこからも追放された状態にいるよう――生まれつき定められているように感じます」と彼女は書いています。

だが、こういった内向的な要素を多く持っていたにもかかわらず彼女はエゴイストにはならなかった。それは、ひとえに幼年時代から彼女が持っていた、苦しみに對する異常な敏感さのおかげである。ウェーユにおいては、自分の苦しみはあくまでも敵しく耐え、他人の苦しみは少しでも肩がわりしてやろうという気持がつねに強い意志で支えられていた。だからこそ、彼女はややもすればエゴイズムの固い殻に人を押しこみがちな潔癖、劣等感、努力型などの性質を高めて真の美德に転化せしめることができたのである。

しかし、他人に對する同情というものは、心の中でそう思ったからといってそれですむものではない。困っている者がいる場合、実際にこれを助けてやらなければ、百万遍心の中で同情をかけてやったところで余り意味のあることではないのだ。この点、ウェーユは実に実行力に富んでいた。彼女は他人のためなら、どんな抵抗があろうと、それに体当りしてでもこれを救おうとした。但し、残念ながら、ウェーユのこうした行動は、いつも挫折で終ってしまった。ル・ピエイでも、パリの工場でも、スペインの内乱でも、ロンドンでも、やることなすことはみなそうであった。だから人は彼女の行動を評して「初めから自分の力には不相应なことを無思慮、無計画、無責任にやろうとするお先っ走りのお嬢さん芸」というかもしれない。なるほど、こうした理想家肌の人は要領が悪

いと往々にしてあることだ。だが、いうまでもなく彼女は実務家でもなければ組織家でもないのだ。それどころか、実務家肌のこの要領の良さこそ、ウエーヌが「不純」としてもっともさげすんだものであろう。一生涯純粹になり切ること、努めた彼女は手練手管を弄して事業を成功させようなどとは夢にさえ思わなかったに違いない。

そうしたことは、大人になってからの写真を見ても容易にうかがわれる。シモーヌは巻頭の写真でもわかるように仲々の器量良しである。にもかかわらず、彼女はわざと自分を目立たないように、また綺麗に見せないようにしていたらしい。袖なしのマントを無難作にはおり、大きすぎるベレー帽をかぶり、大きなブカブカ靴をはいている格好はいかにもなりふりを構わぬ女性という印象をあてる。ティボンの言葉を借りれば「病氣と禁欲的生活とでいつも身体がかがんで老人みあいだったが、ただ、その目だけがすばらしく、無理に打ち壊され、難破させられてしまった生来の美のなかでひとり勝ち誇っているように輝いていた」。彼女がこうした様子をしていたのはなにも奇をてらっていたからではない。戦争中は、日本の女性だってモンペ姿で、今日のようにやたらに紅おしろいをぬりたくっていたわけではないのだ。ウエーヌの生涯は短かったが、その仕事の量は、書き物だけでもたいへんなものである。昼ははげしい労働に従事し、夜は夜で殆ど徹して書き物をしたのではなりふりを構ういとまはない。要するにシモーヌ・ウエーヌという女性には恐らく現代人の多くにとつて最も欠けている「自己自身の思想を行動とし、人生一般に対する無類の誠実さ」をもつて一日一日を送っていた人だったのであろう。そして、それが（どうやら）平和な今日においても、なおわれわれの心に深い感動を呼び起こさないではない根本原因なのである。では、これからティボンの叙言よりももう少しわしく彼女の生涯を辿ってみることにしよう。そのためにウエーヌの

一九四三年（三十四歳）までの生涯を、一九三五年（二十六歳）を境として前期と後期に分け、前期における彼女を、キリスト教を知らない勇敢な左翼の闘士、後期の彼女を左翼の闘士であると同時にキリスト教を知り、これを信じた形而上学者と考えてみよう。勿論、これはウエーヌの生活態度が一九三五年でガラリと変わったというわけではない。彼女がキリスト教を真剣に考えるようになる迄にはそれからかなりの時間がかかった。しかし、とにかく彼女がこの時期にキリスト教を知って、これを問題とするようになってから、その思想に深みと厚みが生じたのは事実である。

シモーヌ・ウエーヌは彼女自身が悲観したような凡人ではなかった。兄に劣らぬ非常な秀才で、十六歳の若さで哲学科の大学入試資格試験に合格、十九歳で高等師範学校にはいり、二十二歳で卒業と同時に国立校教授資格試験にパスして——それは一〇七名の受験者中合格者十一名というきびしい試験だった——ル・ピュイの高校に哲学教授として赴任した。こうして一九三一年から一高校教師としてばかりでなく、いっばしのアナキスト、あるいは革命家としてのウエーヌの生活が始まる。

(2)

ウエーヌは十八歳の頃から左傾していた。しかし、彼女はソヴェトの共産主義体制には始めから批判的であったようだ。彼女の目には、どうしても当時のソヴェトがスターリンの独裁によって、主人となるべきプロレタリアートを官僚組織の奴隷に落しめ、こき使っているとしか映らなかつたのである。そこで彼女は「革命的な世界からスターリン主義者を除外した結果」、アナキスト、サ

ンディカリスト(革命的組合主義者)、トロツキストなどの小グループに興味を持つようになった。すでに高等師範学校に在学中、アランについてプラトンやデカルトを多く学ぶ一方、マルキシズムにも深い興味を持ち、また、自己繁栄を目差した資本主義の戦争に対し強く反戦主義を唱え、徹底した「平和主義者」として学内でも有名だった(この平和主義は一九四〇年ドイツとフランスとの間で休戦条約が結ばれるに及んで自ら撤回することとなった)。

しかもそんなウェーユが高等師範を出てル・ピュイに赴いた頃はといえば、世界中が経済恐慌に痛めつけられていた時分だった。社会全体が苦難のかたまりのようなこの時代にあつて、彼女はただ学校でたかだか数十名の生徒を前にきめられた授業をしていることに満足できなかった。巷には各職場から吐き出された失業者が溢れ、どの労働者の家も今日の暮らしに事欠く有様を見ては、持ち前の同情心が彼女を到底じっとさせてはおかなかった。彼女はサン・テチエンヌに住むロワール州労働組合評議会の副書記テヴノン夫妻と相知るや、早速その世話で、共産党から締め出されたり、党の官僚組織に不満を持ってみずから脱党した人々と親しく交わりはじめ、また統一労働総同盟に加わって文筆活動や実際運動に努めるようになった。ル・ピュイの労働者と一緒になって市長に面会し、失業救済事業の促進を迫ったり、労働運動に参加して警察に逮捕されたり、そうかと思つて鉱山町のサン・テチエンヌをしばしば訪れて自分の特別手当をサークルにあたえたり、一日五フランの失業者手当の金額だけで生活したりして、彼女はなんとか労働者達の苦難を少しでも分かちもとうとした。しかもそうして革命運動に没頭している最中でも彼女は、自分の本職である学校の授業を怠るようなことは絶対になかった。

だが、教育委員会のおえら方がウェーユの社会運動に好意を持つはずはなく、保守的教育者の間

でも協調性のない「変人」の「赤い教師」と睨まれて、ついに翌三二年六月、学期の終了と同時にル・ピュイの高校を去らなければならなかった。それからウェーユはオーセール、ロアンヌと殆ど一年ごとに左遷されていったが、その間われわれはウェーユがいかに洞察力の鋭い、また使命感の強い女性であったかを示す一つの行動に注目しておく必要がある。それは、ル・ピュイの学校を六月にやめてから、続く二カ月休暇をとってドイツに旅行したことである。当時、ドイツは共産党とナチスが互いに勢力を分け合い、左右入り乱れての混戦状態にあった。そして、彼女がかの地へ行った七月には総選挙の結果、共産党が現有勢力を維持するだけで精一杯であったのに反して、ナチスは大幅に議席を獲得し、次第にその体制を固めて、共産党の弾圧を準備している頃であった。

ウェーユのこのドイツ旅行は、いまやナチスが暴力を以て全体主義体制を実現しようとし、心ある人々が自由のために戦っている、その有様を肌に触れて感じたいという気持のあらわれだったのである。そして、できればそれらの人々を援助したかったのだろう。そうすることが擯取されている人々に革命によって真の自由と幸福をもたらそうとする使命感に燃えた彼女にとっては当然なことと思えたのだろう。テヴノン夫人によれば、ドイツから帰ったウェーユはかの地で目撃した事柄で心の底から苦しみ、ナチスに反対するドイツ人たちに加えられた残虐行為を思い出しては、興奮の余り、テーブルの一角に泣き崩れてしまふ有様だったという。

さて、彼女は同年の十月、オーセール女子高等中学校に赴任しラテン語と哲学とのあわせて十五時間の授業を専任することになった。しかし、ここでも彼女は相変らず労働運動に挺身し、また反スターリン系の『プロレタリア革命』とかアランの主宰する『自由な談話』とか『解放された学校』などの雑誌にさかんに寄稿した。その内容のほとんどは、見てきたばかりのドイツ国内の社会状況

の分析にあったが、その中にはヒットラーの暴力による独裁の勝利をすでに予言したのもあった。一九三三年、それはウェーユの予言通りにヒットラーがドイツ首相となり、その後には国会放火事件を口実としてドイツ共産党が壊滅させられた年となったが、彼女は八月オーセールの学校からロアンヌの女子高に転勤を命ぜられた。ロアンヌは地理的にオーセルよりサン・テチエンヌに近かったため、彼女はふたたびテヴノン夫妻を訪れ、ル・ピュイ時代の旧友と親交を暖めた。この時分から、彼女はナチズムの独裁主義より、むしろドイツ共産党員の亡命につれないソヴェト共産党の官僚主義に対してはげしい批判をなげつけ、プロレタリア革命によって搾取階級から奪い返された人民の主権が一人一人の労働者にもたらされることなく、逆に国家の官僚的、軍事的組織がその主権を吸い上げ、握ってしまふ、いわゆる「機構による抑圧」という新しい形態がソヴェトに出現していることを警告した。マルクスの『資本論』を読みふけたのも、またロアンヌの鉱山労働者のデモに赤旗をふりながら参加したのもこの頃のことであった。

翌一九三四年（ウェーユ二十五歳のとき）六月に彼女は哲学論文を書くとの理由で十月以降一年間の休暇を文部省に願ひ出て、七月ロアンヌを離れてパリに帰った。こうして、奉職するたびごとに左遷され続けたウェーユは今度はみずから教職を辞すことになったわけである。その動機は文部省に願ひ出た通り論文を書くためだったかもしれない。しかし、それ以外にもっと彼女にとって切実な理由があったようだ。この間の消息をテヴノン夫人は次のように伝えている。

「ウェーユは坑夫たちとつき合ひ、失業者手当と同じ金額で生活し、労働運動について思索したり執筆したりするだけでは満足できなくなりました。彼女の知性と感受性の両方の鏡に照らしてみても、それらのことよりもっと本質的と思われたことは、労働と労働者との関係を内側から見極め

ることでした。ところで、こうしたことを見極めるには自分自身が労働者になるよりほかに方法がないと彼女は考えました。彼女が女工になる決心をしたのはそのためです。これはわたしたち二人の間で大きく意見がわかれた問題でした。わたしは、プロレタリアであるという状態は事実そうあるものなのであって、自分から選んだってそうなるものではない、とくにこれらの精神状態、つまり人生を受け入れる仕方についてそういえるのだと考えていました。……従ってブルジョワ階級出身で哲学教授資格者の女が感じ取ること、生まれつきの女工が感じ取ることが同じである筈がないというのがわたしの主張でした。こうした考えはわたしだけでなく、サン・テチエンヌでシモーヌの友人として小グループをつくっていた三、四人の同志の考えでもあったのです。わたしたちはこの点について率直に彼女に伝えました。彼女は手先が不器用だし、健康もすぐれないし、あらゆる点でわたしたちは彼女の計画を止めさせようとしたのです」。

つまりウェーユはこの引用で明らかなように、もう共産主義の理論を労働者に教えたり、書きまくったりするだけでは満足できなくなつて、思いきって教職を辞し、自分から進んで工場労働者そのものになつて搾取されている階級の苦しみを身を以つて体験し、その不幸を虐げられている労働者と共に分かち合おうとしたのである。その結果はどうだったろうか。彼女が実際にどんな経験をなめたか語る前に、順序は逆になるがもう一度テヴノン夫人の語るところを引用して、この労働者生活によって彼女が何を得心かを知ることにしてしよう。

「わたしたちの意見は一般的にいえば正しかったでしょうが、シモーヌに関する限り間違っていました。まず、彼女は家庭から離れ、工場の仲間と同じきびしい生活条件のもとで暮し、たぐいまれなる誠実さをもってギリギリのところまで自分の体験を押し進めてゆきました。それと同時に自

分の生の体験を通して、労働者の置かれている状況に鋭い分析の目を向けたのです。当時彼女がわたしにくれた手紙や、『プロレタリア革命』誌に一九三六年のストライキについて發表した論文は、彼女がその適応能力、彼女の言い方を真似ればその『注意力』によって、労働者——とりわけ腕に専門の職のない一般労働者達に課せられた考えられない程非人間的な運命をどれくらい鋭く理解していたか如実に示しています。これら手に職のない労働者はごみ屑同様の取り扱ひを受けており、彼女はその連中の姉妹となったと感じたのです。『わたしは労働者の間をぶらついている教授資格者だということを忘れてしまった』と彼女は書いています。これは決して彼女の言葉の遊びなどではありませんでした。その証拠には、この体験は死ぬまで彼女の心に深く刻みこまれたのでした。

テヴノン夫妻やその同志と最後の別れを上げてから七月にパリに戻ったウェーユは、その年も押しつまった十二月四日に生まれて初めて女工として、パリのアルストン電機会社のルクルプ工場に働かれた。が、彼女の同志が心配していたとおり、その月の二十五日にはもう過労のために倒れて工場を休まなければならなくなった。しかし、身体は弱いが精神は実に強靱な彼女は激しい肉体的苦痛にもめげず、こういった生の体験によって『自由と社会的圧迫の諸原因についての考察』*Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression sociale* あるいは、『服従と自由についての考察』*Méditation sur l'obéissance et la liberté* などとされた論文を生み出し、また『工場日記』*Journal d'un sine* をものごとくしたこととなった。ことに「自由と社会的圧迫の諸原因についての考察」はウェーユ自身が自信を持って書いたものだけあって、後年マルクス主義を批判したこの論文が他の社会問題に関する論文と一緒に『抑圧と自由』*Oppression et Liberté* という題名のもとに出版されたとき、アルベール・カミュが刊行者の言葉として「西欧においてマルクス以後、政治的、社会的思想でこ

れ以上透徹し、これ以上に予言的なものが生み出されたことはなかった」と絶賛したのも当然であるろう。

それからのち、翌三五年（シモーヌ二十六歳）の七月まで、彼女は工場街のアパートの一室を借りて、工場で働き、病と疲労で倒れ、また起きては職を求めて働き、そしてまた倒れるといった連続だった。まったくそれは、病気になるために無茶苦茶に働き、無茶苦茶に働くために病身をわずかの間休めているかと思われる程であった。工場もアルストンの電機会社を首になってから、パリ近郊ブローニー・ピランクルのカルノー製鉄所に変り、そこを首になってからは同じ所にあるルノー自動車工場に働かれた。この間の体験を彼女のいわゆる「注意力」を集中して書き綴ったのが『工場日記』である。無理がたつてか、持病の頭痛はますますひどくなり、夜は寝られず、昼の過重な労働による疲労の積み重なりは彼女の身体を徹底的にさいなんだ。そして、彼女はこのまことに痛ましい体験を通じてはじめて、労働は人間のすべてがになうべき根源的な不幸であり悲惨であること、換言すれば、すでにベルジャエフもいつている通り、労働はいつの世でも、支配者が被支配者の上に置く呪であるばかりでなく、人間全体に対する神の呪であることを知ったのである。テヴノン夫人は工場体験で「ウェーユは労働者いかに非人間的な運命が課せられているかを知った」といつているが、すでにこの頃からウェーユはテヴノン夫人たちにはどうしても理解できないこと——つまり、「彼女の身体ばかりでなく魂にまではいりこんだ」この不幸と悲惨の本質を明らかにするには、経済学に頼るばかりでなく、形而上学的に考えなければ駄目だということを知り始めたのである。

これは筋金入りの革命家の目には情けない転向と映るかもしれない。赤いインテリ女性の辿るみ

じめな敗北の道と見えるかもしれない。事実、ウェーユはそんなみじめさよりも何倍も大きなみじめさをこの工場生活で身体を通して感じたのである。彼女の言葉を借りれば「工場の中で名もない集団となってみな目のにもわたしの目にもごっちゃに混り合ってしまうと、他人の不幸がわたしの肉体と魂とはいり込んでくる。……もはやわたしは過去を忘れ、またあの疲労に耐え生きたがらえるとは考えられず、未来のことも予期できなくなった」ことを初めて知ったのである。そして、それ以来、彼女はこのみじめさ、この不幸が自分の本質をなすものであり、自分はそれに対してまったくなんの特権も優越性も持たない奴隷であり、その奴隷としての生活を完全に生き抜くことによってこそ、彼女ばかりでなく労働者のすべて、いな人間のすべてを虐げる不幸の本質を把握することができると考えたのであった。とにかく、この工場生活によってウェーユはル・ピエ時代自分から徐々に精神的発展を遂げ、次第に絶対者の存在を意識するようになっていったのである。工場生活で身心ともに疲れ果てた彼女を引き取り、その深いふところ、に包みこんで暖かく慰め、元気づけてやったのは両親であった。実際、ティボンもいつているようにこの両親が彼女の体当り的な人生に助けの手を差し延べなければ、彼女の生命はもうこの時にすっかり擦り減ってしまった。たかもしれない。しかも、彼女は最後にはこの両親の願ひもよそにしてイギリスに向けて死出の旅路に旅立っていったのである。両親もつらかったろうが、彼女の方ももっとつらかったに違いない。偉大な使命を受けたひとたちはみなこうした悲劇を自分も味わい、あたりにまき散らさないではないのである。彼女が本書でしばしば「わたしに従おうとするものは両親を捨て兄弟を捨ててこなければならぬ」というキリストの聖言を引用している気持がよくわかるというものである。

両親はウェーユの気分転換を思い立ち、三人うちつれだつて八月から九月までの一カ月をホルト

ガルの浜辺の寒村で過ごした。ある日、両親から離れ一人になった彼女は、とある村の守護聖人の祭りに出会った。その夜、満月の光で銀色に輝いた海を背景に、信心深い女達が古くから伝わる聖歌を歌いながら、砂浜に引き上げられた漁船の周りを、行列を組んで進んでゆくのを見たとき、急にウェーユは都会の工場生活で味わったあの孤独感がこの荒涼とした海岸に、いかに拡がっているのに気づき、人間という存在の悲惨と不幸に強くうちめされたように感じた。女達は彼女の前を、手に手にロウソクを持ち、ヴォルガの船歌にも似た単調で物悲しい歌を歌いつつ静かに進む。そのとき初めて、彼女は「キリスト教こそ奴隷の宗教だ。奴隷はキリスト教から解放放たれることがない。そして、わたしも他の人々と同じ奴隷の烙印を押されているのだ」と身に沁みて思った。キリストの聖心みこころがようやく彼女の心と触れ合い始めたのである。

433 涯 生

やつのことで健康を取り戻したウェーユはその年の十月、新学期の開始とともにブルジュエの女子高等中学で再び教鞭をとることになった。ここでは以前のように学校当局とトラブルを起こすこともなく、同時に組合活動にも前ほどの活発さを見せなくなった。が、それでも農業の実情を知ろうと、生徒の世話でキャロン・ド・グロンの農家に赴き、農耕の手伝いをしたり、これまた教子の手引きでその父親が経営するロジュール製鉄所に行き、そこで進歩的な考えを持っていた工場長ベルナルと知り合いになったりした。この工場はベルナルの労資協調主義によって、他の工場には見られない家族的雰囲気を持ち、『われらの仲間』という機関誌も出していた。ウェーユとベルナルとの間で、労働者の労働条件の改善について交わされた往復書簡は今日『労働の条件』に収められており、また請われるままに彼女がこの機関誌のために書いたアンティゴヌについての非常に透徹した論文は『ギリシアの源泉』に収められている。さらに彼女は、当時アルストン電

機会社の社長として経済界に活躍する一方、随筆家としても知られていたオーギュスト・ドトゥフと知り合いになり、かれが設立した青年経営者のグループの集りにもしばしば出席した。これは経営者を不倶戴天の敵のように見なしていたそれまでのウエーユにとってはかなりの変化だった。多分それは、生産様式を根本的に変えてしまわないかぎり資本主義を倒して社会主義にしたところで虐げられる階級に対する抑圧が軽くなるわけではない、それよりは見込みのある経営者をよりよく啓蒙していった方がもっと実際のだ、という彼女の考えから出たものであろう。そうした考え方は先にあげた工場長ベルナルへの書簡にもはっきりうたわれている。

あけて一九三六年（ウエーユ二十七歳）は第二次世界大戦の前触れとして、スペインに内乱が勃発し、イギリスやフランスのインテリたちが自分の国の戦争でもあるかのようにスペインに馳せ参じ、あるものはドイツやイタリアの支援するフランコ將軍の側に、あるものはロシアの尻押しする人民戦線の側にと参加した年であった。同年七月内乱勃発と同時に、ウエーユはいち早く労働関係を通じてスペイン従軍のための新聞記者証を入手し、八月にはバルセロナに至った。彼女は最初スペイン共和国政府委員ゴルキンにフランコ側の地域の視察を申し入れたが、拒絶されるとつぎにはアナコ・サンディカリスト系の義勇兵となりサラゴッサ戦線のうちエプロ河沿岸の前戦に達した。しかし、部隊の渡河作戦に参加してまもなく敵の弾丸ならぬ炊事用の油鍋を相手に、これをひっくりかえして足に大火傷を負い、ただちにバルセロナ近くのシトヘスの病院に後送されてしまった。病院にあっては彼女が、十分な手当を受けられないため悪くなつてさえゆく自分の傷などそっちのけで、生まれはじめて経験した戦争のむごさに激しい怒りを覚え興奮していた。彼女はスペインに到着以来、日記を書き綴っていたが、そこで戦争という名の、いわれない殺戮行為について様々のす

ぐれた感慨を述べている。こうしてウエーユが病院の粗末なベッドに横たわり、身も心も苦しみを抜いていた時、フランスにいた両親は誰よりも娘の身を案じ、ゴルキンを通じてやっと彼女の消息を知るや、シトヘスの病院に馳せつけて娘の看護に当った。そのお蔭で彼女は松葉杖をつきながらも、どうやらバリに帰ることができたのであった。それはその年の十月のことだったから、彼女がスペインにいたのは約二カ月余りということになる。二カ月という月日はあまりに短いものではあつた。だが、その僅かな間に、彼女はこの内乱が飢えた農民達の自由意志による反逆の現われではなく、イデオロギーを異にする国々の政治的なヘゲモニーの奪い合いにすぎないことをはっきりと読みとつた。そしてまた、犠牲の精神をもって義勇兵となつたものも、この恐ろしい戦争の渦中ではたんなる傭兵と化し、敵であっても人間である相手への敬意は跡方もなく消え去って、残るはただ人殺しだけ……という現実の悲哀をも……。

一九三七年（ウエーユ二十八歳）の一月、内乱に対する失望と、思わぬ火傷とで身心をすりへらしてしまったウエーユはスイスのモンタナに転地療養に出掛けた。文部省には彼女の父が休暇の延長を願ひ出していた。しかし、その間にも、彼女は筆を休めることなく、サンディカリスト系の雑誌やドニ・ド・ルージュモン、ジャン・ヴァールなどがはじめた『ヌーヴォ・カイユ』誌に寄稿をつづけた。そして、やつと七月に身体の癒えたウエーユは今度はイタリアへの旅行に出発した。ミラノ、ボローニヤ、フィレンツェを廻つた彼女はアッシジに至り、聖フランシスコが好んで祈りの生活を送つたというポルティウンクラ小聖堂に詣でたのであるが、このときはじめてこの激烈な赤の闘士は祭壇にぬかずいてキリストに祈りを捧げたのであつた。その姿は、サン・テチエンヌの鉱山労働者のサークルでマルキシズムを講じたかつての彼女とも、またスペインから帰つた直後、民兵のだ

ぶだぶな制服を着、赤いスカーフを首にまいて、生徒たちにブルジェの兵器廠から大砲を盗んでスペイン戦線に送ろうなどと息まいていた彼女とおよそ違ったものであったろう。

十三世紀初頭を聖なる光で照らし出したアッシジの聖フランシスは、いう迄もなく西欧キリスト教世界において中世から近代への黎明に、来たるべき時代の變動に先駆けた最も偉大な聖人である。かれのつくった新しい修道制こそ、中世においていまだ植民地的な役割しか果たしていなかったキリスト教会を本当に民衆のものとし、西欧という風土になじませる原動力となったものであった。鳥獸の言葉まで解した——といえれば現代人からは馬鹿馬鹿しいの一語で嘲笑されてしまうが、それを本当に心の底から信じ得た謙遜で素朴な時代の人々がうらやましい、と思うのはあながち筆者ばかりではあるまい——聖フランシスの福音的な愛はウェーユの気持と相通じる点が大いにあったに違いない。彼女はこの小聖堂にはいったとき「何か自分よりもっと偉大な力」が存在していることをひしひし痛感せしめられたという。

その年の十月、サン・カンタンの女子高等中学に赴任したウェーユは翌三八年（二十九歳の時）激しい頭痛に悩まされ、静養のためにたまたま休暇をとり、枝の主日から復活祭の火曜日まで十日間をグレゴリオ聖歌の唱法復活で有名なソレームのベネディクト会修道院で送った。彼女は八時間以上もの聖祭と黙想に専念し、間断なく襲ってくる肉体的苦痛にもかかわらず、その苦しみを克服して、聖歌に「純粹で完全な歓喜を見出し」（彼女は終世こうした歓喜を労働者の世界に実現しなければいけないと考えていたのだ）、殊に聖木曜日（ミサの昇階誦に歌われる言葉「キリストはわれらのために死ぬまで十字架に従い給えり」*Christus factus est pro nobis obediens usque ad mortem, mortem autem crucis*）を聞いてその言葉が実際に自分の一部分になったように感じた。

また、丁度この時同じ修道院に居合わせたイギリス人の青年から、イギリスの片田舎で聖職につき生涯を祈りと詩作と瞑想とで静かに送ったジョージ・ハーバート等の形而上詩人のことを教えられ、このハーバートの作による宗教詩『愛』から深い感銘を受けた。

Love bade me welcome: yet my soul drew back,

Guiltie of dust and sinne,

But quick-ey'd Love, observing me grow slack

From my first entrance in,

Drew nearer to me, sweetly questioning,

If I lack'd anything,

"A guest", I answered, "worthy to be here":

Love said, "You shall be he".

"I the unkinde, ungrateful? Oh my deare,

I cannot look on thee."

Love took my hand, and smiling did reply,

"Who made the eyes but I?"

"Truth Lord, but I have marr'd them: let my shame

Go where it doth deserve."

"And know you not", says Love, "who bore the blame?"

"My deare, then I will serve".

"You must sit down," says Love, "and taste my meat":
So I did sit and eat.

愛なる御神われに向かい内に入れと命じ給うも
肉と罪とに汚れ汚れしわが魂はあとずさるのみ。
しかれども、愛なる御神

内に入らんとするわが最初の気配の衰えたるをいち早く察知し給い
もそつとわれに近づき給いて、いとも優しく尋ね給う。

「汝なにを足らずとするぞ」と。

「客なり、内に入るにふさわしき正客なり」かくわれ答えしかば、

「汝こそ正客なれ」愛する御神は言い給う。

「この情知らず、恩知らずのわれを正客の名もて呼び給うか。あゝ、主よ。

われは御身を仰ぎ見るも能わざるなり」

この時に愛なる御神、御手にてわが手を取りつつ、ほゝえみて答え給う、

「汝の目つくりしはわれにてはあらざりしか」

「それは真なり、おゝ主よ。されど、われその目を汚したりき。
罪に染みしこの身を、ふさわしきところへ去らしめ給え」。

「さあれど、汝は知らずや、その汚辱、にないたるもののだれなるかを」
愛なる御神われに向かいわが言葉に、重ね語り給う。

いうまでもなく、この素朴な詩の主題をなしているのは愛餐であり聖体でありキリストの十字架である。そして、これらこそウェーユがキリスト教の教義のうちでも最も深い関心を寄せていた問題であった。シモーヌ・ウェーユはこの詩をそらんじて、死ぬほどつらい頭痛の発作に襲われたとき——実際彼女は脳に悪性の腫れ物でもできているのではないかと思う程だった——に、よくこの詩を幾度となく繰り返し誦した。

彼女にとって「キリストが下ってわたしをとらえ給うたのだ」という体験はキリスト教神祕家の書物を読んだ結果でもなければ、幻想によるものでもない。キリストの御姿を脱魂状態のうちに垣間見たのでもなければ、キリストと対話したのでもない。ただ、キリストが彼女のすぐ近くにいますこと——そのことだけを確信したのである。その時まで、ウェーユは人間と神とが真に出会えるなんぞということを夢にも思つたことはなかった。しかし、この時、ソレーム修道院における黙想で、しかもものたうち廻る肉体的な苦痛のさなかにはじめて「愛人と視線を合わせるとき、相手のほほえみのうちに自分への愛を読みとることができるように、確実に愛なる神が存在し給うこと」を知つたのだ。それからさらに丸二年たった一九四一年まで、ウェーユは出会つた神に祈ることをしてしなかつた。それは彼女が祈りのうちに暗示の力が含まれているのを恐れたからである。しかし、あとで述べるように、彼女がティボンの家で夜ギリシア語の手ほどきをしたとき用いた、「天に

ましますわれらの父よ」で始まる王権文となえるのがいつの間にか習慣となつて（それは、ティボンと毎夜それをとなえようと約束したためだったからだそうだが）ついには「まったく純粹な注意力をもつて」それをとなえることができるようになった。そうなると、祈りの最初の言葉をとなえると同時に、彼女の心は感覺的世界を超え、無限の沈黙の世界に没入し、また以前よりはるかに確實に、明白に、そしてよりみちあふれた愛をもつて神が存在し給うことを感じるようになったという。彼女はその当時から地上の美に感動するようになり（女工時代の日記にも「復活祭の日曜日グレンゴリオ聖歌を聞きたいと思つた」などの言葉が見えないことはないが、彼女の気持がこの時ほど美的なものに興味をそそられていたかどうかは疑問だ）「海」「星へ」「扉」などポール・ヴァレリーに心酔した形而上詩を書き、さらに程なくして戯曲にまで手を染めるようになった。これは確かに以前の彼女にはなかつたことである。

ウェーユはこの年一九三八年の六月と七月、もう一度イタリア旅行をしたのち、十月の新学期とともにサン・カンタンの女子高等学校に復職した。それは九一カ年の休暇をおいてのことだった。明けて一九三九年（ウェーユ二十歳）はいよいよ第二次世界大戦の幕が切つて落とされた年である。ウェーユはその年の七月、相変らず健康がすぐれないので文部省に一年間の休暇を願ひ出て、ジュネーヴに赴き、彼の地に滞在していた両親と落合つた。当時そこには、スペインの戦火を避けて移されたブラド美術館があり、彼女は熱心に通いつめたがそのうち、九月三日英仏両国がポーランドを荒らし廻っていたドイツに対し宣戦を布告したのを知るや、急いでパリに戻つた。そして、いつ戦火にさらされるかわからないパリに止つて、静かに『バガヴァッド・ギータ』を深く包む東洋的な神秘主義に堪能したり、ギリシアの古典を読みふけつたりしていたが、それもつかの間で、翌四

〇年五月、ドイツ軍がとにかくオランダ、ベルギーを突き抜いて北部フランスに侵入するに及び、ついに六月十四日、パリが陥落する二日前に避難民の群に混じつて南フランスをさして落ちのびていった。途中、足に怪我をしたが、それでも徒歩でようやく、ヴィシーに至り、そこで二カ月間を両親とすごした。その間ヒットラーとベタンとの間で休戦条約が締結され、それ以後フランスは北の占領地帯と南の自由地帯に二分されることとなつた。どんなことがあつてもフランスは守り抜かれるに違いない、という彼女の固い信念はこうしてドイツ軍の軍靴によってあえなく踏みじられるってしまったのである。彼女はヴィシー政府に大学時代の多くの旧友がつとめて知っていることを知つたが、かれらがいずれも祖国をヒットラーの魔手から守る気概のないに、せ平和主義者なのに大層絶望した。そして、自他ともに許していた「平和主義者」の看板を彼女はきれいさっぱりとおろしてしまつた。その際の述懐は「一九三九年まで平和主義者とその行動についてわたしがおかしてきた大きな過ちは、長年の間、ひどい病氣のためわたしが無力だったせいである。わたしはかれらの行為をよく観察し、会合に出席しかれらと論議を尽くすことができなかつた。だから、かれら平和主義者がこんなふうにして祖国を裏切る素質を持つていようとは見破れなかつたのだ」というものだった（『超自然的認識』三二七頁）。にせ平和主義者達と袂を分つと同時に彼女の正義感と同情とは資本家に搾取されるプロレタリアートから、ヒットラーの暴力によって蹂躪されている祖国フランスへと移つていった。彼女はあらためて自分たちを育ててくれた「根」——今やドイツ軍によって完全に踏みじられようとしている祖国フランスという「根」を何とかして守ることこそ自分の——いや、フランス人全体の責務であると痛感した。そういう気持をはっきりと書き綴つたのがヴィシー滞在中彼女が書き始め、ついに未完に終つた戯曲『救われたヴェニス』である。

『救われたヴェニス』という劇は全部が全部彼女の創作というわけではない。それには歴とした粉本がある。その一つは十七世紀イギリスの劇作家——一女優に恋して酬われず、失意の余り三十三歳で夭折した、十七世紀のバイロンと称されるトマス・オトウェイ Thomas Otway の最大の傑作 *Venice Preserv'd or A Plot Discovered* もう一つは十八世紀初頭に歿したフランスの貴族で詩人アントワーン・ド・ラ・フォス Antoine de la Fosse の書いた悲劇でオトウェイを真似た『マンリウス・カピトリヌス』(但しその背景は古代ローマになっている)、さらに他の一つは二十世紀初頭のオーストリアの詩人兼劇作家フーゴ・フォン・ホフマンシュタールの *Das geschickte Venedig* である。ことにオトウェイの作品は当時大当りをとった劇で、ドイツ語、フランス語はおろかイタリア語、スペイン語、ロシア語にまで翻訳され、いわば一時はヨーロッパ全土を風靡した劇であった。ところで、オトウェイのこの作にはさらに一つの粉本がある。それはサン・レオール師が一六八二年に書いた『一六八一年におけるヴェニス共和国に対するスペイン人の陰謀』と称する歴史小説である。ウエーユはオトウェイやアントワーン・ド・ラ・フォス及びホフマンシュタールのことについては一言も触れていないけれど、ウエーユの作を交えて四者を比較してみると、細部の点でかなりこれら先輩の三作から影響を受けていることが明らかである。以下大体の筋を述べてみよう。

時は一六一八年、処はヴェニス。当時イタリアのほとんどを領有していたスペインはそれでも飽き足らず、イタリア全土を完全に我がものにしようとするたくらんだ。その野心の邪魔をして毅然として独立を保っていたのがヴェニス共和国である。そこでヴェニス駐在スペイン大使ベドマール侯はこの都市を乗っ取るうと陰謀をはかり、その仕事を当時めきめき勢力を得て来たフランス人貴族ルノーと、これまた人々の間で人気のある船長ピエールにまかせた。かれらはヴェニスの傭兵たちを

うまくだきこんで、いよいよ聖霊降臨祭(その日はヴェニスとアドリア海とが結婚する祝日)の前夜、真夜中にヴェニスを急襲し、町中に火を放って市民を殺戮することにした。『救われたヴェニス』はその題名通り、この陰謀が失敗し、前日の夜明けから翌日の夜明けまで、二十四時間とちょっとの間に、あるいは汚され、失われたかもしれないヴェニスがその美を保つことができた顛末を物語るのである。と同時にこの劇はヴィシー政府のやり方がまったくの裏切り行為であり、美しい祖国を台なしにしてしまうものであることを皮肉っているともとれよう。

第一幕。幕が上がると、陰謀に加担している連中が売笑婦の宿に集まって、船長ピエールと、ピエールが軍事行動を一任したかれの親友ジャファイエとの友情のこまやかさについて語り合っている。その男同志の友情は、二人ともに思いを寄せている美貌の娘ヴィオレッタへの愛よりもっと強いと連中の一人がいう。ヴィオレッタはヴェニス政府十人会の書記の娘である。貴族のルノーは「反乱の暴力は一時的な悪にすぎない。その後に来る永久の善のために破壊という言葉がなくなる程徹底的に破壊するのだ。すぐれた陰謀家は何のためらいも愛も感じてはならない。敵を哀れと思うものは、仲間を裏切るものだ。この世を変えようという大事業を前にして人間の生命の一つや二つ何だというのだ」と叫ぶ。それを聞いてジャファイエの顔はふと曇った。ルノーはすぐさまこれに気づいてジャファイエに疑心を懐き、ピエールにジャファイエを殺せと迫る。しかし、信義に厚いピエールはあくまで親友を信じてルノーの忠告をはねつけ第一幕が終る。

第二幕。ピエールは十人会の警戒心をとくためにヴェニスを離れることになる。かれは、いよいよ今夜に迫った大役の実現を親友のジャファイエにまかせる。かれはそうすることによって、ルノーの疑心にたいし、自分の変りない友情をジャファイエに示しえたことを心ひそかに喜ぶ。

「この国は君のものだ。おずおずと君のいうがままになるその肉体を、君は死の抱擁でぐっと強くだきしめてやるのだよ。」

この国はもう君のものだ。支配者になるとはなんと素晴らしいことだろう。ピエールの友情と無欲とは「人間は例外なく自分の権力を振いたがるもの」と信じているルノーなどの理解できるものではなかった。ルノーのジャファイエにたいする疑いは晴れはしなかったが、ピエールが去ってしまったのでやむなくかれは今夜の計画をジャファイエに打ち明ける。それによれば、反乱軍は掠奪、暴行、凌辱、殺戮、放火など悪業の限りを尽くしてヴェニス市民を根こぎにしてしまおう——つまり、たった一夜の暴行によって、市民がもうそれを思い起こすのもいやなら、また将来再びそういうことが起こるのも恐ろしくて考えられない程の状態につきおとし、伝統への愛着はおろか、過去も未来も考えない人間——記憶すら喪失し、思考することにも恐怖を感じる人間にしてしまおうというのである。ルノーはそれをつぎのように語る。

「征服者という行動的人間は他人に自分らの夢を見させるものだ。」

征服するものは自分の夢に生き、征服されたものは他人の夢に生きる。夢を現実よりいっそう力あるものにすることができるもの、それが武器というものだ。

ジャファイエはだまってそれを聞き、それから一人になってもう一度ピエールとルノーの言葉を思い起こして考えにふける。

「この国も、海も、人民もおれのもの。そうなるときがもう来ている。おれの手がそれを急にぎりしめ、こなごなにしようそのときが……」

しかし、かれの恋人ヴィオレッタはいう、「ヴェニスは難攻不落の城。なぜなら、ヴェニスはそ

の美によって守護されているから」と。彼女の父親は「美が国を守ってくれるなどとは子供の考え」とひやかすが、ジャファイエはヴィオレッタの言葉こそ正しいと彼女に語ってきかせる。そして、同志たちによる暴力の讚美と、ヴィオレッタをその化身とするヴェニスの守護である美の崇高さとの板挟みとなったジャファイエは、いよいよ大事決行の切迫を告げる落日を見ながら「おれはこの太陽のように非情になることを許されているのか」と嘆く。かれはその嘆きのうちに、自分達の陰謀が人間にもっとも大切な「根」を破壊することにはかならないと悟る（ヴェーエはこの箇所を覚え書きの中で、ジャファイエのこの悟りは進行中の陰謀、つまり「時間」を停止させようとする超自然の愛の悟りと説いてゐる）。

第三幕。ルノーの疑り深い目を逃れてジャファイエはついに十人会に一件を密告する。十人会はその代償として同志二十人の生命の安全を保証する誓いをたてる。だが、ジャファイエは十人会によって見事に裏切られる。主謀者たちはかれの目の前で次々に捕えられ、拷問にかけられる。かれの耳には

「わしは全世界ほども広い国を支配する方法を知りたかつたのに……わしはそのために生まれて来たのだ。わしの魂はそのことだけを望んでいたのだ」

というルノーの悲痛な叫び声や

「おお神よ、もしもわたしがかれの声を聞き、

にわかにかれの手に触れることができさえしたら……もしかれの

視線がわたしにそそがれてさえいたなら……」

というピエールの最後まで友を思う声がひびいてくる。

しかし、こうなつてはもうジャフィエにはどうしようもない。ヴェニス^の崇高なる美に「救いの言葉」をもたらしたジャフィエの唇に、十人会は裏切りという煮湯を注ぎ込むことによつて報いたのである。超自然の愛を悟つたかれはいまやたちまちにして受難者になつてしまつた。しかも呆然自失したかれにたいし、市民たちは「国家と同志への二重の裏切りもの」というのしりを浴びせかける。その瞬間、かれはみずから救い出したヴェニス^のがいつか破壊されることを予言するのである。やがて、反逆者たちの処刑が知らされ、ジャフィエは十人会から送られた賞金をつき返してヴェニスを立ち去ることになる。すでに祭りは賑わしく始まり、早くそれを見たがつてはいる番兵たちは、ジャフィエを護送して行くのがいやになる。丁度そのとき町の一角ではごく僅かな反乱軍側の傭兵たちがヴェニスの兵士に取り囲まれて苦戦していた。ジャフィエの番兵たちはやにわにかれを傭兵たちの群のなかに押し込め、その側に劔を置く。そして、思わずそれをとつて立ち向かつたジャフィエを一突きにさし殺す。これで番兵たちは正当な理由でジャフィエを殺し、一刻も早く祭り見物をするができるわけだ。

「これでおれの恥辱も帳消しだ。この国がなんと美しいか、それもやがてじき見えなくなつてしまふのだ。おれは生命の国を旅立つて二度と戻らぬ。

これからおれが行くところには日の出もない——国もない」

ジャフィエが息を引きとる前にもらす最後の言葉「国」とはまさに現在の人間を過去の宝、つまり伝統につなぐ「根を持った国」のことにはかならない。「根を持った国」を集団による破壊という最大の犯罪から救い出した男はこうして「根もなにもない死の国」へと旅立つてゆく。そして、そのあとに前夜のことにはなにも知らないヴィオレッタが登場してあたりいっばいに美を振り撒きなが

ら歓喜の歌を歌う。

「おお美しき日の出よ。太陽はにわかにはほえみつわが国土と数限りなき運河とを照らし出す。

汝の平安を受けるすべてのものにとり、その光りと輝きを見ることのいかに楽しきことか」。

以上が『救われたヴェニス』の荒筋であるが、未完であるとはいへ劇全体に流れているもつとも大きな特色は、全三幕を通じて常に激しい破壊的な程強烈なリズムが全てを呑み込もうとしていることである。第一幕では反逆者たちの大望や野心の強いリズムが崇高なヴェニスの美を圧して鳴り響いており、それが第二幕にまで及んでいる。しかし、ジャフィエだけがそのリズムに乗り切れず、かすかながら破端が生じてくる。そして、第三幕になると、ジャフィエの心をすっかり占めた静かすれまでの動的なリズムを完全にストップさせてしまう。これに続く第二の特色は、三幕を通じて、登場人物がみな共通な場を持たない独自の閉ざされた実存性を有しているということである。たとえば、第三幕で同志の助命を懇願するジャフィエと、その願いを問題にしない十人会の人々、あるいは怒りと絶望のために黙秘を続けるジャフィエと、かれの口を無理に割らせようとする番兵たち——これらの話はすべて、ジャフィエという受難者の立場からいえばこの世のものではない距離あり、また、この世のものからいわせれば受難者など非現実だという、どうにもしようのない距離があるいは対話の断絶を暗示している。もしも他人とか他人及び自分をひっくりかえす一つの状況とかが、自分のつくり出した考えを反映しなくなつたら、自分にとっては他人も状況も完全に無関係なものとなり、もはや存在しないものになつてしまふというわけだ。だから、どの登場人物も他人との対話を持たず、ただ一人己れを失うまいとして疎外された状況に必死にしがみついている。従つて主要な登場人物はみなそれぞれに違つたせりふ廻しを与えられている。たとえば、反逆の兵士

たちは散文で語り、ヴィオレッタは一一音節(5-6)の無韻詩、ジャフィエは一三音節(5-4-4)の無韻詩という風に……。そして、それが汚れを知らぬ美を象徴するヴィオレッタ、野心の権化であるルノー、完璧な友情を表わすピエール、全き英雄にして受難者なるジャフィエ等登場人物の間のコントラストをいやが上にも鋭く浮き上がらせてゆく。

ヴィシーで、祖国崩壊の危機に際し、平和主義者がいかに無力な利己主義者にすぎないかを痛感せしめられたウエーユはその年の十月にマルセーユに行き、そこから文部大臣宛に、自分の休暇の期限が過ぎたから、あらためてアルジェリアの高等学校に赴任させて貰いたいという願い書を送った。しかし、ヒットラーにおもねってユダヤ人迫害の先棒を担ぎ始めたヴィシー政府はすでにユダヤ人の教授資格を剥奪してしまったので、返事が来るはずはなかった。この間彼女はマルセーユで、「南方手帳」誌の同人達と交わり、同誌にエミール・ノヴィスというペンネームで『イリアス、力の詩』を発表し、また本訳書の原本となった手記をも書き始めた。

一九四一年(ウエーユ三十二歳)、彼女は『ウパニシャッド』などインド古代哲学の研究に没頭すると同時にカトリシズムにも接近し、六月にはマルセーユのドミニコ会修道院で難民たちの保護に当たっていたジャン・マリ・ペラン神父とはじめて出会った。ウエーユは「枯葉のように」みじめな自分に暖かい友情の手を差し伸べてくれる神父に感激し、神父は彼女の深い靈性にうたれて、二人はたちまち意気投合し、しばしば宗教上の議論をたたかわせた。彼女はこの時分すでに「キリスト教と農場生活」(一九五三年七月「ラ・ヴィー・アンテレクトュエル」誌に掲載)を書いて、教会が都会化している現状をなげき、農場生活におけるカトリック・アクションの強化を主張した。彼女はフランスの農場の現実を体験したいと願っていたが、この神父の紹介でいよいよ八月七日に、かねてか

らの希望であった農民生活を日々身をもって生き抜いているギヌスターヴ・ティボンと会うことになる。ティボンの叙言に出てくるウエーユの像は自然、彼女の人生のこの辺に焦点をあてられている。では、これからティボンのひととなりを紹介することにしてしよう。

ギヌスターヴ・ティボンは一九〇三年九月二日、フランスの中部アルデシュ県、サン・マルセル・ダルデシュという寒村に生まれた。家は代々の農家で、かれも村の小学校を低学年でやめ野良仕事を手伝わされた。だからティボンは生粋の農民である。しかし、かれは若いときから知識欲が旺盛だった。たまたま隣人にゆたかな蔵書家がいたので、そのひとの好意で本を自由に読ませてもらい、独学でラテン語、ギリシア語、イタリヤ語、ドイツ語などを学んだ。また生物学や数学に興味を持ち、クラীগスの著書に親しみ、ニーチェに心酔したが、聖トマス・アクィナスを発見するに至って無神論を捨て、ふたたびカトリックの信仰を取り戻した。その後ジャック・マリタンと交わり、一九三〇年頃からエッセイを「レヴェュー・トミスト」誌などに発表し、一九四〇年頃にはかれの思想はガブリエル・マルセル、マルセル・ド・コルト、アンリ・マシス等の献身的な努力によって紹介され、農民哲学者として人々に知られるようになった。だが、かれの方ではそんな他人の評判などに耳を貸すことなく作家生活に入ることも望まず、今日でもアルデシュの土地に一農夫として孤独と瞑想の生活を送っている。一九六四年、アカデミー・フランセーズはティボンの功績をたたえて文学大賞を送っている。著書には大体一九四〇年代のものが多い。その幾つかをあげると、『診断』Diagnosies, 1940 『人間の運命』 Le Destin de l'homme, 1942 『ヤコブの梯子』 Echelles de Jacob, 1942 『現実への回帰』 Retour au réel, 1943 『神の合わせ給うしゆの』 Ce que Dieu a uni, 1945 『日々の糧』 La tain de chaque jour, 1946 『二人の生活』 La vie à deux, 1947 『ニーチェ』あるいは精神の衰

退』Nietzsche, ou la declin de l'esprit, 1948 などがある。

ティボンの名は日本でもカンドー神父の紹介でかなり以前から知られていた。カンドー神父はパリ・ミッシェン外国宣教会の司祭で、大正十四年に初めて来日され、第二次大戦時に従軍司祭として一度フランスに帰り、重傷を負い、医師から余命二年と宣告されながら昭和二十三年ふたたび来日され、三十年になくなられた有名な親日家の神父であられた。同師はティボンとは親友で、かれの著作活動を大いに援助し、『神の合わせ給いしもの』を『愛の哲学』と改題して邦訳されている（昭和二十四年河出書房。この書がウェーユとの出会いによって多くの影響を受けている点は否めない。殊に「愛の浄化」にそれが著しい。なおカンドー師については池田敏雄氏によるカンドー師の伝記が中央出版社から出ている）。

ティボンは田園生活における深い瞑想の所産を格言風に表現するのが得意である。その意味からいえば、ティボンにしてはじめて、乱雑に書き散らされたウェーユの手記から縦と横とのつながりをうまくつけながら断片を選び抜きそれを編み上げて、本書のように見事な作品を生み出すことができたといえるかもしれない。結果的には、ウェーユがティボンと「出会い」、そして彼女が手記の大部分をかれに託したということは、ウェーユにとってもわれわれ読者にとってもまことに幸なことであった。

ウェーユは九月二十二日いったんティボンのもとを離れ、ブドウの取り入れを手伝うために近村の農家に備われ、十月二十五日ふたたびティボンのもとに帰った。だが、それからいくばくもなくして家族から電報を受け取り、急遽ティボンのもとを去ってマルセーユに戻った。

マルセーユに戻ってから後、彼女はまたペラン師のもとに通いはじめた。ペランは彼女にカトリ

ック信者になるよう洗礼をすすめたが、彼女はいまはまだその時でないと断った。その理由は大抵つぎの通りである。①自分は「まだ信仰を知らない多くの不幸な人々」と共にいることを、神からあたえられた使命と考える、②この使命にもとづくと、自分は唯物論や無神論はいうまでもなく、その他どんな思想にも無関心であるべきであり、そのいづれの一つにもとられてはならないことになる、③キリストの聖体を受けるには内心に後悔の念が一瞬も残らないほど純粋な状態にひたりきらなければならぬが、自分にはそうした絶対の純粋性がない。従って聖体拝領が恐ろしい、④受洗には神の強い意志が働いて、自分の意志はどうあろうと無理にも自分を祭壇にまでひきずってゆかなければならぬはずだが、自分にはそこまで神の至上命令が下されてはいないように感じられるなど（それに、のちになって彼女が書いた理由によれば「洗礼を受けることによって集团的組織に屈従せしめられるといけない」というのもある『超自然的認識』一八三頁）。つまり、彼女にいわせれば「受洗の時は神がその御意志にもとづいていつか彼女に告げて下さるだろう。それまでは心を尽くし注意して待てば、いつか突然洗礼を自分から願わないわけにはいかなくなる。自分はその瞬間に賭ければよいのだ。いまの自分にはあまりにも汚れており、他人にたいしても重大な恥ずべき過ちをなしてきている」、というのであろう。しかし、ペラン神父の方はウェーユが熱をこめてキリストや聖体や恩寵のことを語り、またウェーユの人となりそのものが禁欲的、無欲、そして清純なので、もっと時間をかけて彼女と論じ合えばきつと信者になることができると信じ、受洗こそしていないけれども彼女はカトリックの信者と本質的には違いないと考えた。他方、ウェーユの方はというと、そうしたこの老神父の好意にはつきりとした拒絶の意志を示すことができなかつた。それは彼女の性質が優しかったためである。神父は彼女と話しているうちに感激の余り見えぬ目から涙を

流し、それをしばしば着ていた純白の無袖肩衣カフタでぬぐった。彼女はその様を見て、それが自分の罪のように感じた。のちになってウェーユは「ペラン神父と話をしていると、わたしはお気の毒という気持ちが先に立って何もいえなくなりました」と語っている。彼女がこうして心から敬愛していたペラン神父との悲しい別れは、翌年の三月、彼女がまだマルセーユに在るうちにやってきた。神父はマルセーユからモンペリエに移らなければならなかったのである。彼女はまだ神父がマルセーユに在るうちからせせと神父に手紙を書き送り、それは五月末まで続いた（それらは今日『神を待ち望む』の中に収められている）。そしていよいよ神父がマルセーユを去るに際し、この世では二度と会えぬであろう神父のために彼女は『神への愛と不幸』及び『神に対する暗黙の愛の諸形態』という二つのすぐれた論文を献げた（その内容については次章参照）。彼女はそこではっきりと、老神父の前ではついに言い出しえなかったすべてのことを告げたのだった。

ウェーユはこうして霊的世界を深く探求する一方、社会的活動も相変らず盛んにおこなった。彼女は激しい前線で負傷兵の手当てをする看護婦が不足していることを聞くと、すぐさま看護婦の部隊を編成する計画を立て、その計画書をロンドンの友人に送ろうとした。これは翌年、彼女がニューヨークからロンドンのモリス・シューマン宛に出した建白書のもとなったものである。そのため、彼女は官憲に親英活動の疑いをかけられ、軍法会議に喚ばれてあやうく投獄されることとなった。

一九四一年もあわただしく過ぎ、年改まって四二年（ウェーユ三十三歳）となった。三月、ウェーユは復活祭を機に、ギリシア文明を直接継承しているとの理由でかねてあがれていた南仏カルカソンヌに旅行した。途中ドワールネのアン・カルカット・ベネディクト会修道院にとまり、ベネディ

クト会のきびしい戒律による修道生活やロマネスク風のすばらしい教会建築に魅了された。カルカソンヌはその昔ローマ教皇インノケンチウス三世に派遣された十字軍がアルビ派異端を殲滅した古戦場である。ここには彼女の高等師範学校の学友ルシアン・ルボーの家があった。久しぶりに会ったウェーユの、「枯葉色」の地味な手織の服、素足にサンダル履きという浮き世ばなれした姿は、学生時代の「赤い乙女」どころか中世の聖女の再来のようにルボー家の人々の目には映ったことだろう。当時の彼女はもう以前の赤の闘士ではなく、立派な神秘家になってしまったかの観があった。たまたま、その家には小説家のジャン・ポーラン（一八八四—）も居合わせて、日暮時まで楽しく語り合った。夜にはいつて彼女は夜間外出禁止令を破ってジョエ・ブースケ（一八九七—一九五〇）の家を訪れた。ブースケは第一次大戦で負傷し、それ以来ずっと病床生活を送っていた詩人で小説家である。二人とも人生の苦しみをその底まで味わい尽した同志のこととて話はずみ、いつしか夜も白みかける頃となっていた。「夜明けにウェーユは隣室のマットに横になっただけで、それ以上は構わないで欲しいといった」とブースケは書いている。それから何時間もたないうちにウェーユは修道院に帰っていった。それがブースケとの最初にして最後の出会いであった。彼女は『救われたヴェニス』やその他自作の詩をかれに献げ、ブースケはそれに手紙で答えて「あなたの韻文は散文よりもずっと澄んでいます。あなたの韻文のリズムはあなたの意識のリズムそのもののように思われます」といっている。また彼女は前線の看護婦部隊の編成計画についても第一次大戦の苦しい経験をなめているブースケに意見を聞き、かれの賛成の言葉に大いに意を強くしたらしい。しかし、ブースケと彼女との間の往復書簡でわれわれが最も注目すべきものは、一九四二年五月十二日付の彼女の手紙の一節であろう。そこでウェーユは彼女の人生観の根本的観念を次のような簡潔

な言葉で述べている。

「肉体の衣をまとうたものが、かれらの生まれ合わせた時代において苦しみや悩みに責めさいなまれるということは幸なことです。なぜなら、かれらはその苦しみの真理によってこの世の苦しみを知り、その苦しみの現実によってこの世の苦しみを考える可能性と働きを持つことができるからです」。

一九四二年五月二十五日、それはいよいよウェーユがマルセーユを離れ、祖国フランスと永遠に訣別する日であった。その少し前、ギェスタヴ・ティボンがマルセーユに彼女を訪れた。そして、一夜を語り明かした。ティボンはその時の印象を次のように伝えている。

この夜の思い出を過去における他のすべての思い出の一つと考えるなら、それは神聖冒瀆というものだろう。というのは、その時のことは時の流れの外に存在し、記憶の中に固定した場所を占めていないからだ。ただ、わたしに伝えることは、その時のわたしは、いまやふたたび根源的な光の中に呼び戻されようとしている、まったく透明な存在と向き合っていたということだけである。わたしは今でもまだ、彼女がわたしと一緒に夜の十二時近く、わたしの泊っていたホテルにやってきたとき、あのマルセーユの人氣のない通りにこたましたシモーヌの声を聞くことができる。彼女はキリストの福音について語っていた。言葉は彼女の口を絶え間なくついでた、まるで木に実がなるように極めて自然に……。彼女の言葉は、真理の説明というより、真理をそっくりそのまま、少しも傷つけないでわたしの心に注入してくれるように聞こえた。わたしはもはや時空を超越し、ひたすら清らかな光にあたって育てられているように感じられた。「われらの知るシモーヌ・ウェーユ」二三三頁。

他方、この夜のシモーヌの方の感想はどうだったか。残念ながら、それにははっきりと当たるようなものは残されていない。ただ、多少ともそれと関係があるのではないかと思われるようなものがある。それは彼女の死後、アメリカとロンドンで彼女が書き綴ったノートブックの中にはさんであるのを見つけられた二枚のペラ紙の文章である。これは今日『超自然的認識』に「プロローグ」として収められているが、それがいつ書かれたかについては、「一九四〇年二月か三月にパリで」というのと「一九四一年マルセーユで」というのと説が二つに分かれている。そのいずれも臆測の域を出ないのだから、もしも許されるならば、それが書かれたのを後者と仮定して見るのも面白いかもしれない。

かれはわたしの部屋にはいつてきていった。「このわからず屋で愚かな情けない奴め。わたしと一緒に来い。そうしたら、お前の心に疑問など起こらないことを教えてやるう」。そこでわたしはかれのあとに従った。

かれはわたしを教会に連れていった。それはあたらしくてみにくい教会だった（これがマルセーユならドミニコ会修道院附属礼拝堂のことであろうが、ペラン師によればそれは「あたらしくもみにくくもない」ということだ。パリなら『工場日記』復活祭の日曜に出てくるルフェーブル街サン・アントワーヌ・ド・パドウ聖堂）。わたしたちは祭壇のところまで進み出た。「ひざまずけ」といわれたが、わたしは「まだ洗礼を受けていない」と答えた。「お前が真理に対してそうするように、愛の心をもって祭壇にぬかずくのだ」。かれにふたたびいわれてわたしはその通りにした。かれはわたしを連れて教会を出ると、とある家の屋根裏部屋にわたしを導いた。開いた窓からは町中が見わたせた。建築用の足場だの川だの、その岸で荷をおろしている船だの（パリならセーヌ河）……。かれは「座

れ」と命じた。

わたしたちは二人きりだった。が、時々だれかが這入ってきて会話に加わった。しかし、かれらはすぐにどこかへいなくなった。

もう冬ではなかった。が、春というには早かった。木の枝は丸裸だし、お天気だけれど寒そうな風が吹いていた。

それから日の光は一段と輝きを増したが、やがて弱くなり、いつか月や星の光が窓からさしこんでくるようになった。そして、また夜が明けはじめた。

時々かれはおし黙ると、食器棚からパンを取り出して、わたしにも分けてくれた。そのパンは本当のパンの味がした。以来こんなおいしいパンをわたしはたべたことがなかった。

かれはまたブドウ酒も飲ませてくれた。それには太陽と、それからこの国の土の香がじみこんでいた。

時々、わたしたちは屋根裏の床の上に横になった。甘い眠りがわたしを虜にした。それからわたしは目をさまし、素晴らしい太陽の光にうつとり見とれた。

かれはわたしになにか教えてくれると約束した。けれど、なにも教えてはくれなかった。わたしたちはまるで旧友でもあるかのようにお互いに遠慮なくなんでも話をした。

ある日、かれはわたしに出てゆけといった。わたしはひざまずき、かれの脚をだいて、わたしを追い出さなくてくれとたのんだ。しかし、かれはわたしを無理に梯子段のところまで連れていった。わたしは夢中で梯子段を降りた。そのとたんにわたしはあの家がどこにあるのかわからなくなってしまった。

それ以来、わたしはあの屋根裏部屋を探し出そうとはしない。かれがわたしのために来てくれたのは間違いだっただ、ということが今になってわたしにはっきりと分ってきた。わたしはあの屋根裏部屋に住める女ではないのだ。わたしのいるところ——それは監獄の独房か、インテリのクズやキザな連中の集まっている部屋か、それとも駅の待合室か——しかし、あの屋根裏部屋では絶対にないのだ。

恐れたり悔んだりするが、それでもわたしはかれが言ってくれた言葉を思わず繰り返してしまふ。だけど、わたしにはかれの言葉を正しく憶えていることができない。あのひとはもう二度と再びわたしにそれを教えてくれようとそこにはくれないのだから。

かれがわたしを愛していないことは、わたしにも分っていた。どうしてかれがわたしを愛してくれないかあろうか。だけれど、心の奥底では、ひよっとするとあのひとはわたしを愛してくれているかもしれないと考えることがある。もちろん、わたしがまともにもう考えるのじゃない。わたしの心のほんの一部分が、もしかしたらと考えるだけ——でも、そう考えるだけでわたしはこわくなってふるえてしまうのだ（『超自然的認識』九頁以下）。

この書き方はティボンのにくらべてはるかに象徴的だが、それだけ暗示に富んでいる。ウェーユが「かれ」といつているのは聖霊のことであり、「梯子段から降りた」とは樂園追放のことかも知れないが、しかし、もしもこれをマルセーユの出来事とするならば、それは同時にティボンでありティボンの泊っていたホテルの屋根裏部屋のことと考えることもできよう。「愛している」というのも、勿論神のことであらうが、それにティボンの映像が重なり合っていないか断言できないであらう。一説によればこの時ティボンは彼女に求婚したということであるが、そんなことはど

うでもよい。とにかくマルセーユにおける二人の間にはその時までの単なる友情以上のなにか——
 テイボン自身の言葉を借りていえば「浄化された愛」——があったことは確かである。

さらにまた、彼女のこの言葉を見ると彼女が自分の性格によく気付いていたことが分る。テイボンはウェーユに深い愛を感じながらも、彼女の性格の弱点をつぎのようにいつている。

「彼女はいくら自分をはぎとっていても、いつもその底には恐ろしく強い我意がひそんでいた。それは、こうして自分を裸にするのも自分の働きのだから、自分流にやってよいのだ、という気持である。だから彼女は、まったく禁欲的な生活を送っても、そういう生活を送るのだという気持にとられ、それから解放されたことがなかった。そのため、彼女はエゴという言葉をうまく抹殺した積りでいたかもしれないけれど、事実は、その言葉は彼女にとって依然として下線^{アンダーライン}が引かれていた」(ペラン、テイボン共著『われらの知るシモーヌ・ウェーユ』)。つまり、テイボンのこの言葉を日本語で平たくいってしまえば「ウェーユは業の深い女だった」ということになるであろう。だが、立派なことは、御本人がそれをよく承知していたことだ。そして、彼女のこの根強い性格は、見方によつては一口に「業の強い女」とだけではすまされないのである。彼女はその性格に気付き、それをなくそうと努力した。しかし、われわれはそここそ、ベルジャエフがつねに主張していた「人格の眞の創造性」を認めることができないだろうか。彼女が教会にはいらなかったということは彼女の「我の強さ」を表わすより、むしろ彼女がまったくあたらしいキリスト像を内心において創造していたからではないだろうか。そして、一見まことに奇怪な彼女のキリスト論は、内心のそのあたらしいキリスト像を何とか言い表わそうとした象徴的説明とはいえないであろうか。いずれにせよ、ウェーユのこの一文はわれわれにとってまことに興味深いものを有している。

その後、テイボンとウェーユは駅のプラットフォームで最後の別れをした。彼女はさりげなくカバンから十冊ばかりの大型ノートを取り出して、まるでひとに煙草でもやるかのようにポイとそれをテイボンに渡した。その時の彼女の態度は、わざとか否かは知る術もないが、まことに淡々としたものだ。テイボンは別の所で記している。彼女が、のちになってオランからたよりをよこし「三、四年たつてわたしの消息が分らないときには、どうかあのノートをあなたのものにして下さい」といつてきたのは、テイボンの叙言にある通りである。

五月の末から六月の初めにかけてカサブランカの難民収容所にとどまった後、彼女は家族と一緒に六月末にニューヨークに到着した。そして、その直後「ニューヨーク・タイムズ」を読み、パリ市中でユダヤ人狩りが行なわれ二万名がドイツに送られたり、フランス人の成人男女が強制労働を課されたりという、フランスの悲惨な実情を知って彼女はフランスを出たことを今さらながら後悔した。そのため、自分の部屋にとじこもり、寝^{スリーピング・バッグ}袋にはいつて床に横たわったまま丸二日も食事をとらないことさえあった。「わたしは憂鬱です。とても憂鬱です。しかし、それがなんの役に立つでしょう。こうして悲しみに打ちひしがれているぐらいなら、フランスでもっと多くの危険と苦しみにあつての方がまだしもましです」。これがその時の彼女の気持だった。

彼女は毎日曜日、ニューヨークのマンハッタンにある黒人地区^{ハレム}に行き、そこにあるバプティスト教会を訪れ、黒人の素朴な宗教的熱狂に感激したり、かれらの貧困な生活に同情したりした。また毎日、一二番街にあるカトリック教会のミサにも出席した。しかし、彼女の苦しみは少しもなぐさめられはしなかった。

七月末ウェーユはアンリ四世中学校で同窓だったモーリス・シューマンがド・ゴールについてイ

ギリスに渡り、自由フランスのスポークスマンとして、また、フランスにいるレジスタンスの連中との連絡員として活躍していることを知った(シュューマンは今日ド・ゴール大統領のもとで閣僚の一人となっている)。そこでさっそくロンドンにいるかれのもとに手紙を送り始めた。彼女がシュューマンに訴えたのは、自分がフランスを離れたわけは、外地へ行ったらフランスのためにもっと多く尽くすことができるかと思つたこと、しかし、その考えは甘かつたこと、自分はニューヨークに来ていままらながら後悔していること、自分がかねがね第一線看護婦部隊の編成について考えており、これを戦線で実現したいと思つていること、独軍占領下のフランスと自由フランスとの間のレジスタンス運動を円滑にするための連絡員となりたいこと、そのためには彼女がやってきたストライキの煽動や、プロレタリア運動の地下工作の体験が役立つであろうことなどをこまごまとしたため、最後に「わたしは同志としてあなたにこの現状からわたしを助け出してもらいたいと心から望んでおります。今のままではわたしにはとても耐えられません。多くのひとはなぜそれがそんなにつらいかは分つてくれないでしょう。しかし、同じクラスで学んだあなたにはそれが分る筈です」と切実な訴えを附け加えた。七月三十日に出した彼女の手紙は無事シュューマンの手にはいったが、なにしろ戦時下のこととて自分の気持が相手に通じるかどうかを恐れて、彼女は同じ日にもう一通の手紙を書き、これはたまたまニューヨークに来ていたフランスの空軍将校に直接托した。その大尉こそ今日フランスにおける左翼の驍将マンデス・フランスであった。

その手紙にたいしてモリス・シュューマンから激励の返事が程なく彼女のところにとどいた。これは絶望のどん底にあつた彼女にとってなよりの贈り物だつた。こうして、彼女とシュューマンとの間に幾通かの書簡が交わされた。その書簡の一節は彼女の根本思想を知る上に大切な手掛りとな

るであらう。

「わたしの性質にとつて苦しみと危険は欠くことのできないものです。但し、だれもの性質がそうでなくて幸でした。もしそうだったら、社会は苦しみと危険なしにはいられなくなつてしまふでしょうから。けれど、わたしだけはこの性質を他の性質と換えるわけにはゆきません。……今日世界中に広がっている苦しみをみると、わたしはそれに取りつかれてしまつて、自分の身体がいうことをきかなくなつてしまふような気がします。ですから、わたしがこの虚脱感から抜け出すことができるように——そして無益な後悔にさいなまれないですむように——わたしに十分役に立つ苦しみと危険をあたえてくれるよう手配してくれませんか。このままではもう絶望するより仕方ありません。危険はわたしが生きてゆくためのパンなのです。こんな性質の女に生まれついたのは不運というほかありません。しかし、その性質はわたしの真の本質なので、変えようとしても変えることはできないのです。おまけに、それは性質の問題である以上に、わたしにとつては確実に神からあたえられた使命の問題でもあるのですから……」。

つまり、ウェーユははつきりと自分に課された使命を自覚していた。それは、一般人が幸福を求めぬのに反し、自分は不幸を求めなければならぬということだ。かれらが幸福を求めれば求めるほど、自分はかれらの代りに不幸を求めなければならぬ。罪なくして十字架についたキリストと同じように、罪をおかさないで、しかもみずから十字架の苦しみを求めなければならない。なぜかこの世の一切は、均り合ひにもとづいてゐる。他人が幸福になるにはだれかが不幸にならなければならぬ。だれもが全部幸福になるわけにはいかないのだ。それが現世である。それなら、他人を幸福にするために自分が不幸になることこそ、課された使命ではないか。これは見方によつてはひ

どくおごりたかぶった考えであり、そのために彼女は神の怒りをかい、最後まで見捨てられることになるかもしれない。しかし、もしも幸福と不幸とが均り合わなければならぬとするなら、自分を置いてだれが不幸を求めるものがあるだろうか。不幸、苦しみ、わざわい、悪いことならなんでも、できるだけ沢山自分にふりかかってくれたい。自分は神の恩寵どころか、神によって永遠に見捨てられても不幸を求めて生きてゆくのだ。ウェーユのキリスト教思想は色々な要素がまざり合ってかなり複雑だが、つきつめたところ彼女の形而上学的思想の根本は以上の考えを土台として成り立っていると考えてよいであろう。ウェーユが苦しみばかりでなく窮極的には「神に見捨てられる」ことを求めていた事実は、この時分彼女が自分なりに作った祈禱文によっても明らかである。

「在天の父よ、キリストの御名のもとに祈願いたします。願わくば、わが五体が麻痺し、身体を動かすことがまったく不可能となり、わが意志にもとづいて身体を動かそうとすることさえできなくなり、感覚の働きはすべて失せ、完全にめい、おしとなりませう。一つの考えと他の考えとをまとめる力がなくなり、読んだり勘定したりはおろか、話すことさえできないものとなりますように。どんな悲しみも喜びも感ぜず、他人ばかりか自分を愛することもできないうろくした老人のようになります……。父よ、わたしから肉体と魂のすべてを剥ぎとり給え。そして、わたしのほんの一部分たりとも、永遠のうちにとどめられることのないように——わたしのすべてを無となし給うように祈ります」。

ニューヨークにおけるウェーユの憂鬱な日々をわずかになぐさめてくれたのは、上記したモーリス・シューマンの手紙と、それから彼女がマルセーユで知り合い、ニューヨークで一緒だったシモーヌ・ディーツであった。この良き友はリヴァーサイド・ドライブのアパートに住んでいたウェー

ユのもとを朝九時頃に訪れて色々議論した揚句、夕方になって帰っていった。あるいはまた、ウェーユの方がフランス領事館の一室を借りていた友人を訪れて心づくしの馳走にあずかるかした。そして、二人でアメリカ・インディアンの伝説を尋ねてそれとエジプトの神話と比較したり、七世紀チベットの神秘的詩人「賢者ミラレパ」の生涯を探るためにチベット語を習い始めたりした。

ディーツによると、その時分のウェーユの服装は相変わらず地味で、彼女の母が編んでくれたというジャンパーに、緑色の勝ったダークのウールのスカートか、それとも、グレイとレッドのチェックのスカートをいつも身にかけていた。それは長くて彼女のくるぶしのところまで達していた。靴はモカシンのようなひらたいヒールで、ひももついていなかったという。

シモーヌ・ディーツはカトリックだった。そこで、二人の間に洗礼の問題がよく議論の種となった。ウェーユはニューヨークを出発する直前、エステルライヘルとクーチュリエという二人の神父にそのことについて教えを乞うた。エステルライヘル師は今日でもキリスト教とユダヤ教の接近に尽力している、アメリカではかなり有名な神父であるが、彼女は同師と相当にやり合ったらしく、同師はウェーユの死後「橋」という同師の編集する論文集に『シモーヌ・ウェーユの謎』と題する長論文を書いて、カトリック的な立場から彼女のキリスト教思想を鋭く批判している。ウェーユはクーチュリエ師には洗礼その他教会についての本質的な質問を三十五箇条にまとめて提出した。それらはすべて、彼女の得意とするキリスト教的混合主義からカトリック教会の門戸の狭さを非難したものであるが、それらの書簡は今日『修道士への手紙』に収められている。

ウェーユは一日も早く祖国フランスに戻るため、まずイギリスに渡りたいと願ひ、ビザを手に入れるのに都合がよからうと負傷者応急手当の講義をハーレムで受け、やつのことで試験に合格し

た。その時の筆記試験で「ヨードは消毒剤の名か、衛星の名か、正しい方に○をつけよ」式の○×問題を見て、「アメリカ式の教育は低級です」と断じたウェーユの態度は面白い。

十一月の末になって待望のビザがやっとおり、ウェーユは九日に両親のもとを離れた。その時彼女は両親に「もしわたしにいくつも生命があったら、その一つを父母に捧げたい。けれど、わたしには一つしかありません。そして、それはどこかよそで用いなければならないのです」と語ったという。

スウェーデンの汽船に乗って十六日の航海を無事終えたウェーユは友人のディーツと共にリヴァプールで下船した。しかし、それからちょっと厄介なことが起こった。というのは、すでにスペインの内乱で人民戦線に参加し、また平和主義者というレッテルがはられていた彼女は、共産系のスパイではないかと怪しまれ、外国から来た乗客を査察するための収容所に思わず長く止めおかれたからである。しかし、モリス・シューマンの努力で身のあかしが立ち、十二月十四日によく拘留を解かれたウェーユは元気でロンドンに到着、しばらくの間自由フランス婦人志願部隊の兵舎にとどまった。けれども、それから一月して彼女はかたに嘆願しても、独軍占領下のフランスに赴く許可を得ることはできないことを知らされた。「わたしは五月にマルセイユを離れてしまったことを前にもまします後悔しております」と当時彼女は両親宛の手紙に書いている。

明けて一九四三年（ウェーユ三十四歳）の一月、ある寒い日曜日に、彼女はロンドンのノッティング・ヒル近くにあるホランド・パーク、ポートランド・ロード三番地、フランス未亡人の家の一室を借りて、そこに移り住んだ。この地帯はその日の朝独軍の爆撃をくったばかりのところだった。フランス未亡人ははじめてウェーユに会ったときの印象をこう語っている。「シモーヌさん

はひどくやつれた風で、一見して今度の間借人はお金のないひとだと思えました。とにかく、あんなに悲しそうな顔つきの女のひとにあったことはありませんでした。お部屋に通してあげましたが、部屋がひどく冷えているので、ガス・ストーブをつけましょうかといったら、一言だけ『結構です』とおっしゃった。そして、靴をぬぐとベッドに横になってしまわれましたので、どうしようもなく部屋を出ました」と。フランス夫人には十四と十になる男の子がいた。シモーヌはすぐに彼等と仲良しになり、勉強の手伝いをしてやったり、お伽話を聞かせてやったりしたが、そのかわり、なるべくラジオをつけないように頼んだ。ラジオのニュースでフランスのことを聞かされるのが彼女には耐えられないことだったのである。

最初の二週間は一階の部屋だったが、それから見はらしのよい、その家で一番高い所にある部屋に移った。そして、殆ど毎日徹夜で書きものをした。せきがひどく身体は衰弱するばかりなので、フランス夫人は休息と食物とを十分にとるようにすすめたが「フランス人が飢え死しそうになっているいま、どうしてわたしだけ休んだり食事したりできましようか」といって、ただにがいコーヒーを飲むだけだった。彼女の身を案じた夫人が空襲警報が発令されている最中だったが、それでは二人のお子さんがあるので「と夫人に言い、いよいよ空襲が始まってもしぜいぜい台所におりてくるぐらいで、地下室にもぐるようなことはせず、少しも動じる気配はなかったという。フランス夫人によくわかったことは、この病身の間借人は他人に同情されたり、世話を焼いて

もらうことを極度に嫌ったということである。たとえば、シモーヌの靴があまりに汚れているので、時々みがいてやると、彼女はそれを嫌ってどこか夫人の目のとどかないところに靴をかくしてしま

う。部屋はベッドの上であれ、椅子の上であれ、床の上であれ、いたるところに書きかけの紙が散らばっているの、それを片づけて掃除してやると、留守のうちに黙ってそれをやられたら、もとに戻すのに幾日も手間がかかるから絶対に紙をいじらないように、そのまま放っておいてくださいとさびしくねじこんでくる。写真で見ると、この夫人はいかにも世話好きらしい苦勞人の様子で、それだけにシモーヌの性質を呑みこむまで大分苦勞をさせられたらしい。

ウェーユはロンドンの自由フランス政府——つまり闘うフランス国民委員会——の内務部に配属された。その部長はアンドレ・フィリップ、彼女の直接の上司はクロゾンであった。ここで彼女に与えられた仕事はいえ、非占領地域から送られてくる様々の政治文書に目を通し、資料をまとめ、それについて報告書を作成することであった。当時レジスタンスの人々はまだ激しい地下戦線を闘い抜いている最中であつた。にもかかわらず、連中はやがて占領が解かれた後再び祖国に訪れるであろう平和な日々を目差して、新憲法、法律、教育、労働者の社会的地位、その他様々な事柄について周到な計画を練り上げていたのである。つまり、平和を求めて敵と闘う彼らはローラーのごとく、形骸化しきつた旧い社会体制の残骸を踏み潰してゆく一方、新しい平和な社会の建設のための土台工事もしていたわけである。

ウェーユは占領下のフランスへ戻ることが許されないと知らされてもなかなかそれを諦めることが出来なかつたようだ。人類に白熱した「苦しみの預言」をもたらしたシモーヌ・ウェーユも、この一事に関して、まるでせつちかちでききわけのない子供同然であつた。彼女は何度も嘆願を繰り返した。けれど、なんとしてもフランス帰還だけは彼女には許されなかつた。それを許したらどんなことになるか、そんなことは火を見るよりも明らかであつた。彼女をフランスにやる

ことは、角も持たず、臍も弱い小羊をむざむざ腹を空かした狼どもの中に放りこむようなものである。フランスではだれも彼女の手を欲しがる者がなかつた。それでも、試しにアンドレ・フィリップはフランスのレジスタンス運動員達にウェーユを使えるかどうか問い合わせてみた。すぐさま答へは返ってきた。「彼女だつて、とんでもないことだ」。

彼女には不都合な点が三つあつた。第一に、一目見てユダヤ人と分る顔つきをしていることである。きつと国内に一步足を踏み入れるか入れないかのうちに捕まってしまうただらう。第二には、彼女持ち前のあの放心癖である。そして第三に、無類の無器用さ、おまけにこれまたこの上もない動作の鈍さ。どれ一つをとつてもそれだけで地下工作員としては失格となる欠陥だ。しかも、それを三つ全部持ち合わせているのだ。レジスタンス運動員達の返答も当然のことだつたといえよう。

だが欠陥を埋め合わせるような大きな長所もあるにはあつた。祖国のために一命を投げうって献身しようとする彼女のひたむきさ、そしてなにもものも恐れない勇氣がそれである。これだけは彼女はだれにも負けはしなかつたらう。たとえ独軍に捕われ拷問に責められたとしても、彼女が口を割る気づかいなど全くなかつたらう。眼をえぐられ、肉を断ちわられ、その中に煮えたぎる鉛を注ぎ込まれたとしても、よもや一言半句も漏らしはしなかつたらう。きつと彼女はキリストが味わつた苦しみの何百分の一にも足りないようなそんな苦しみを笑つて耐えたに違いない。

地下運動に参加したいというウェーユの希望にとつて都合のよいことがもう一つあつた。というのは、不思議なことに、消耗極に達している彼女の様子にもかかわらず、アンドレ・フィリップが彼女の吹聴する脚力の強靱さ、重労働に対する耐久力の大きさを真に受けて、彼女を並以上にスタミナある人間と思ひ込んでいたことである。といつて、結局のところ、彼女がお荷物であることは、

動かしがたい事実であった。なぜなら、彼女自身が如何に勇敢で口が固くとも、彼女が仲間うちにいれば、独軍の目は自然そちらの方に引き寄せられ、それによって他の同志達に危険を招くことになるのだから。

フィリップはなんとかして彼女を説き伏せようと努めたということだ。だが、ウェーユはなかなか後にひこうとはしなかった。時にはあまり彼女が強情なので、面前では胸にしまっておく積りだった彼女のユダヤ的な容貌についてまでふれることがあった。そんな時、彼女はじつと唇を咬みしめたままで、耳に戸をたてて聞こうとしなかったそうだ。彼女にしてみれば、何が何んでもフランスに戻りたかったのである。フランスに、否、苦しむフランスの同胞達の中に自分の身を置かないわけにはゆかなかったのである。それも理解できないことではない。彼女はこう訴えるのだった。「わたしは祖国の人々と苦しみを共にしたいのです。住む家を焼かれ、着るものもなく飢え苦しんでいるかれらと一緒に苦しみたいたいのです。キリストが他所で今、現に苦しんでいるというのに、わたしだけが苦しみから離れてここにこうしていることがどうして許されるのでしょうか」。敵占領下にあるフランスで危険な使命を果たそうと、これまで内務部に志願してきた者は数

少なくなかったろう。が、およそこんな変わった訴えをしてきたものは他になかったに違いない。ウェーユはかねがね胸中に練り上げ、イギリスに着いたら是非とも実行に移そうと考えていたあの前線看護婦部隊の計画が、すぐ実践されることを期待していたが、まだその機会を見つけないことができずにいた。そこで彼女はフィリップに頼んで、自分の計画をだれか上の方の人に見てもらおうとした。フィリップは、この願いを聞いてやり、試しにこの計画をド・ゴールに見せてみた。けれどもド・ゴールは計画書にチラリと目を通すや、すぐに「まったく気狂いじみている」と問題に

せず、計画の立案者、つまりウェーユに会ってみようという気にもならなかったようだ。むしろ、アンドレ・フィリップの話によれば、イギリスの陸軍がこの計画に大分大きな興味を示したということだ。だが、ウェーユにとっては、苦しみに悩む祖国フランスの同胞が問題なのであって、イギリスの陸軍がどう思おうと、そんなことはどうでもよいことだったに違いない。こうして、彼女がブースケ等、その他多くの人々の情報を参考に長年練り上げてきた前線看護婦部隊計画はついに目の見ずじまいに終わったのだ。

胸の中に湧き上がってくる不満を抑えながら、彼女が明日のフランスのために活動している各地地下運動グループから送られてくる仕事を片づけている間に、一日一日が過ぎていった。みずから地下活動に加わり、苦しむ祖国のために血を流し、生命を削ること、それこそ彼女が求めていたことだったのに。彼女は畢竟自分が今、現在やっている仕事が重力に左右される一時的な理想を地下活動の戦士達に補給することでしかないのを良く知っていた。そのため、彼女は自分のエネルギーが無駄に漏失してゆくのをますます強く感じるのだった。

だからといって仕事をいい加減にやるような彼女ではなかった。彼女の仕事はいつも完全であった。彼女は報告書を書きあげると、それをみずからアンドレ・フィリップのところへ持っていった。報告書に丹念に目を通すとフィリップは別にお世辞でもなんでもなく正直に、彼女の報告書の中には今すぐにも役立つ案や、将来きつと役立つであろう案が沢山織り込まれていると批評した。事実、フィリップの批評は誤まっていなかったのである。その証拠に、占領下にあるフランスに、国外ばかりでなく国内からも解放を目差す勢力を盛り上げるため、革命最高議会を組織すべきだというウェーユの考えは、珍しく、ド・ゴールの注意を惹き、すぐに実行に移されているのだ。報告書に付

け加えられた彼女の批評、あるいは小論には非常にすぐれたものが多く、それらの多くは今日『ロンドン雑記および最後の書簡集』*Essays de Londres et dernières lettres* (Paris, N.R.F., Gallimard, 1957) にみられる。

与えられた仕事を一所懸命になつて処理している間にもウェーユの胸の中に燃えさかる地下活動への熱望は一向に弱まらなかつた。弱まるどころか、むしろますます音高く燃えあがつていくようにさえ思われた。彼女は何度か何度も繰り返してアンドレ・フィリップを説得しようとした。けれどもその度ごといつも徒勞に終つた。彼女は残念でならなかつた。無念さは次第につのり、到底耐えられない迄になつた。おまけに持病の頭痛が始まり、頭の鉢金が割れんばかりかと思われた。このため、とうとう彼女は二、三日仕事を休まねばならなかつた。けれども彼女が休んでいるといないとお構いなく、報告書や資料は次々にフランスから送られてくるのである。彼女は再び痛む頭を報告書作成の仕事にぶつけなくてはならなかつたのだ。実際、彼女の仕事振りには、ぶつけてゆくという表現がびつたりあてはまつた。彼女には仕事を何日分かに割つて今日はここまで、明日はあそこまでといった当世の役所仕事みたいなことはできなかつたようだ。勿論、明日があるかどうか分らぬ時代でもあるが、決してそればかりとはいえない。とにかく、彼女は一度自分の事務室に入つたら、その仕事をし終えるまで二日でも三日でも出てこなかつた。しかも夜はいつでも彼女の部屋の灯は絶えず消えることがなかつたという。

そんな忙しい仕事の合間にも時々ちょっとした暇ができることがあつた。そういう時は彼女はよく市内を散索したりした。ロンドンの場末にある居酒屋はまだシェイクスピア喜劇でも見ているかのような潑刺とした笑いに満ちていた。街ゆく人々にもローレンスがイギリス人の特徴として述べ

ている、人の良さと朗らかさが感じられた。今まで自分が本を通じて知つたイギリスと少しも違わないイギリスを目のあたりに見ることは、彼女にとって大層うれいことだつたに違いない。日曜日には、ハイド・パークへも行つてみた。公園ではまるで古代アッティカのアゴラさながらに、そこここに円陣が敷かれ盛んに演説が行なわれていた。ウェーユは、そういった円陣を一つ一つまわりながら、演説に聴きいつている人々を細かに観察することに興味を覚えた。円陣の中によく若い女の子の姿が混じつているのが見られた。彼女達は教会にゆくようにという母親のいつけをきかずに、遊び仲間の男の子達に逢いにきているのである。ウェーユの鋭い目はこういつた女の子の姿を見逃さなかつた。「彼女達には、もう祈るといふことがどんなはたらきを持つものなのか分らなくなつてしまつているのでしょう」。ウェーユはそんな風に彼女等の浮わつた笑いさざめきを嘆いている。

たまには、シモーヌ・ディーツと連れだつて郊外に遠足に出掛けることがあつた。ある時二人で矢張りロンドン郊外にある一修道尼院の庭を借りてキャンプしたことがあつた。ところが突然の激しい土砂降りでテントからはボタボタと大粒の雨漏りがしてきた。すぐに尼さんが来て、尼院に寢室の用意があるから中でお寝すみなさいと声をかけてくれた。ディーツはありがたく礼を述べて、その夜を尼院で過ごすことにしたが、ウェーユは頑としてテントに残ると言い張つてきかなかつた。翌朝ディーツがいつてみると、ウェーユはついに終夜まんじりともしなかつたらしくずぶ濡れの寝袋の中で腫れぼったい目をしてブルブル震えていたそうである。

苦しい仕事の合間のほんのわずかなやすらぎの一時。どんな禁欲的な生活に徹し切っている人だつてそのくらいのやすらぎは許すものである。だがウェーユはそうでなかつた。彼女にとって安ら

ぎはむしろキリストの手足を刺し貫いた鉄釘のように胸にすどく突きささり、キリストの苦しみを彼女の心に思い起こさずにはおかなかったであろう。一日過ぎる。何干というフランス将兵が倒れる。また一日過ぎる。何干というフランスの子供達が母親の温い懷を奪われる。それらの者達の苦しみを全てキリストの背にくくりつけ、自分はバラバのように許された気になって潤沢な安らぎの一時を享受する、そんなことは到底耐えられないことだったに違いない。彼女は毎日のようにファーム街にある教会へ行き御弥撒にあずかり、またディーツが訪れると、よく一緒に黙禱しようとさそった。「わたしの名によって二、三人が集まるところにはわたしもまたそこにいる」(マタイ一八の一九)というキリストの御言葉を彼女は一時も疑っていなかったのだ。

戦争は知らず知らずの中に、彼女のそれだけでなくも痩せ衰えた身体から少しずつ肉を削り取っていた。このころではもう彼女は夜、床に入って寝むということがなかった。大概冷たい床の上にそのまま横たわるか、さもなければテーブルの上で寝むかするのが常になっていた。そのために晝方の寒さに耐えられず、夜も白む前に目覚めてしまい、三時間かせいぜい多くても四時間くらいしか睡眠がとれなかった。眠っている時間、それも彼女には、ある種の安らぎに感じられて仕方なかったのかもしれない。半裸のまま冷たい石の上に横たわっている祖国の人々のことを思ったら、床の上だつて絹布団のように贅沢すぎる、そう彼女は感じたのかもしれない。彼女はできる限り無駄な時間を切りつめ、身をすり減らすように仕事に励んだ。どんなに不本意な仕事でも、与えられた義務は忠実に果たさなければならぬ。それが彼女の心の深底に刻みつけられた信条なのである。

一日、彼女の身体はすり減っていった。三月にかつてウェーユがリスボンからの船中で知り合ったジャック・カブランという少年がアメリカからやってきてウェーユと会った時、ジャック少年

はまるで別人に会っていると思えなかつたそうである。そこで少年が会つたのは船中で自分のことを可愛がってくれた仲良しのウェーユではなくて、瘦せこけて神経ばかりピリピリしている一人のオールド・ミスで、近づき話しかけることなどとてもできそうになかつたという。

日が経つにつれて、フランス行き希望が絶対に聞き容れられないのが、はっきりしていった。それにつれて、彼女の焦燥もますますつのり、ついには気も狂わんばかりになっていった。「兄さん、なんだってまたわたしは、フランスを去つたらというあなたの忠告なんかを聞き容れたりしたのでしょうか。一体、なんだってそんな弱気な気持になつたりしたのでしょうか。それが口惜しくて、毎日身をズタズタに引き裂かれるような苦しみにさいなまれています」。この頃の気持を彼女は兄にそう書き送っている。

やがて苦しみに絶頂がやってきた。というのはアメリカからロンドンの生活を通じて衷心からつきあつてきた唯一の友人、シモーヌ・ディーツが使命を帯びてフランスに潜入することになったのである。ウェーユはディーツにせがんで、なんとかその役目を自分に譲つて貰おうとした。けれどディーツは彼女の願いを聞き容れてはくれなかつた。別に彼女が意地悪をしたわけではない。ウェーユをフランスに送ることがウェーユ自身にとって、また他の同志達にとつてどういった危険をもたらすかは、今では誰でもが知るところだった。一方、友人に頼みを断わられたウェーユは半ば心神を喪失したかのようになり、それまでも極くわずかしか振っていなかった食物をすっかり食べなくなつてしまった。「あなた、そんなことしたら死んでしまつてよ」とディーツがなんとか食物を口にさせようとしても「放つておいて、どうなつたかまわぬの」といつて相変らずパンの皮一かけら喉を通そうとはしなかつた。朝九時頃下宿を出てゆき、そのまま、夜になつても帰つて

こないことがしばしばになった。翌朝早く給仕の少年が事務室にはいると、痩せこけた身体を机にもたれかけたままウェーユがまどろんでいた。仕事している間に自失状態に襲われて時間の観念がなくなり、最終電車に乗り遅れてしまったのであった。彼女にとって、現に今キリストが苦しんでいる祖国フランスから完全に断絶された英国は、實在性をすっかり失ってしまった幻と影の国に他ならなかった。それは天国への梯子となる地獄の苦しみから隔てられた、熱くもなく冷たくもない、それ故に神から最も離れた土地であった。

シモーヌ・ディーツの祖国潜入命令は都合によって取りやめになったが、その時ウェーユの喜び様にはいささか常軌を逸したものがあつた。けれど彼女にしてみればそうするのも無理ないことだつたかもしれない。彼女が地上で最も深く愛した年老いた父母を振り捨て、わざわざイギリスくんだりまでやってきたのは一体何のためだつたか。そこを中継ぎに祖国フランスに戻り、人々の苦しみを少しでも取り除き、かわりに自分の背中に載せ、かれらを楽にしてやりたい、ただその一念のためではなかつたか。その唯一の願いが今では半ば、否、殆ど絶望的になっていたのである。もしも自分が祖国に戻れないのなら、だれも戻ってはならない。彼女がそうまで思い込んだのは確かに彼女特有の「我」の強さ、そしてある意味で傲慢さのせいかもしれない。しかしただ、そうとだけいって、彼女を「苦しみを売りものにして」被虐的な宗教的利己主義者と考えるのは、ウェーユの真心を汲み取り損ねた、あまりに情無い狹量な心根といわざるをえない。現代人の心を蝕んでいる皮肉な、そして分不相応な批判的態度、こういったものをすっかりかなぐり捨て去って、ここでは自分の義務を果たせないで焦りもがいている彼女自身の苦しみがどんなに大きなものであつたかを素直に認めてやるべきだろう。

やがて、彼女のフランス行きが決定的に不可能だということを思い知らされる日がやってきた。クロソンの一行がまたいつものように重大な使命を帯びてフランスに潜入する機会がやってきたのである。ウェーユはこの時とばかりに、直接の上司であり、家族とも交際のあつたかれに、是非とも自分を一行のうちに加えて欲しいと頼み込んだ。だが答えは「前線近くに工作員を投入する飛行機は数が少ないし、それに小型だから人の数には限度があるんだ。そのためにはどうしても最も役に立つ人々だけを選びすぐつて隊を編成しなければならぬ。残念だが君は……」というものであつた。この一言はフランスに戻り同胞の苦しみをみずからの苦しみにしたいという彼女の燃えるような願いにとつて、まるでマッチ一本の炎に大だらいの水をざんぶとぶっかけるような庄倒力を持っていた。勿論ウェーユが完全にフランス行きを諦めてしまったわけではない。だが、この時以来彼女はもはやどんなに嘆願を繰り返したところで永遠にフランスには戻れないかもしれない、心に強く思うようになっていったらしい。

それからのウェーユは前にもまして深く闇と影の世界に紛れこんでしまったようだ。今や彼女はまったく無気力になってしまい、ただただ仕事によって自分の身体を一時でも速くすりつぶしてしまおうとしているかのようだった。その仕事振りはますます精神的になつたが、その他のことにはまるっきり興味を失ってしまった。相変らずほとんど断食に近い食物拒否を続け、時折人の家によばれて、食事を出されるようなことがあつても、ほんのわずか形ばかり手をつけるだけで、あとは食べなかつたという。まして食後のデザートに果物でも出ようものなら「フランスでは子供達が何も食べられずお腹を空かしているのです」といって、どんなに勧められても絶対に手を出さうとはしなかつた。

実際、彼女は少しも物を食べたいという気にならなかったようだ。勿論、医学的に見れば、それはそろそろ徴していた肺病からくる食欲不振なのかもしれない。だが、果たしてそれだけだったろうか。決してそうではあるまい。そうだとしたら肺病に罹ったものは誰も皆、彼女のように物を徹底的に食はずに飢死するはずではないか。彼女はこう考えていたのである。「自分自身に正直であらうとするものにはみずからの心を欺くことも許せないことである。そして一般的にいつの時代、どんな状況に置かれていても、人間が自分の欲しいだけのものを食べ放題に食べるということは常に、自分自身のうちに宿る気高い真の気持を欺くことになるのだ。こういうわたし自身、これまで何度かそんな卑しい自己欺瞞を繰り返してきたのだ」と。彼女の目蓋の裡にはいつも瘦せ細って腹ばかりつき出しているフランスの幼い子供達の姿がちらついていたのである。そして、彼女は自分がそんな風に断食することによって、本来自分に摂取されるはずであった栄養が、なんらかの神秘的なはたらきによって、そっくりそのままそうしたフランスの子供達の血液に吸収されるに違いない、と、固く信じ込んでいたのだ。なぜなら、前にも述べたように、神秘的にも世の中は不思議な均衡のはたらきによって均り合っているのだから。

両親とはありがたいものである。アメリカにいるウエーユの父母は娘の身を案じて、少しでも彼女が元気で働けるようにと、自分達の不自由な生活をきりつめてまで小包にしているいろいろな物資を送ってくれた。けれどもキリストに従うものには、純粹な、子を思う親の気持に甘えることすら許されなかったのだ。彼女は父母が折角そうやって苦労して送ってきたものを、惜しげもなく一つ残らず困っている他のものに分け与えてしまい、自分は相変わらず冷えきった床やテーブルの上に寝み、半断食状態を続けるのだった。そればかりではない。ウエーユは内務部から支給される給

料に最も手を焼いたという。砲火に焼かれ、あるいは銃剣にこづきまわされている祖国の人の苦しみを他所に、知識人という厭らしい生命安全保障書を与えられ、十字架ならぬ机に釘づけされ不本意ながらやる内務部での仕事。なる程、彼女はその仕事のために遮二無二働いてはいる。だがそれは一日でもはやく自分の身体を抹殺してしまふためなのだ。なのに、内務部からはその労働によって失ったエネルギーを、再び体内に取り入れるようにと給料が支給されてくる。勿論、経済学からすれば、それは当り前過ぎることである。だが、彼女にはその当り前のことがどうしても耐えられなかったのである。彼女は給料を捨てるわけにもゆかず、さんざん考え抜いたあげくその一部だけを部屋代などにとり、残りはこれまた困っているもの達にやっってしまうのだった。

来たるべき日はついにやってきた。四月中旬のある日、内務部にウエーユを訪ねたシモーヌ・デーツは、珍しくウエーユが二日続けて欠勤していることを知った。そこで不安に思った彼女はすぐさまポートランド・ロード三十一番地のウエーユの下宿にいつてみた。彼女の不安は不幸にも的中した。ウエーユは例の如く床に横になったまま（否、倒れたままといったほうが正しいだろう）虫の息になっていたのである。驚いたデーツはすぐに気つけのブランデーを含ませ、それから医者と呼ぶため家のものに声をかけようとした。すると意識を取り戻した彼女は「お願い、約束してちょうだい、決して誰にもいわないと」と言いながらデーツにしがみつくのだった。「とんでもないわ。あなた生命が惜しくはないの、これっきりになってしまつてよ。フランスのために働くことも出来ないわよ」デーツが強い調子で答えると、ウエーユは涙にむせびながら、ついに諦めたように、「ああ、もうだめだわ、全ておしまいよ……。さあ病院に連れていって」と弱々しげに言うのだった。すぐさま彼女はミドルセックス病院に運ばれた。診察をした医師ベネットは文句な

く即座に入院を命令した。彼女はそれほど弱っていたのである。ベネットは彼女の衰弱ぶりから個室に入れるよう命令したが、彼女は弱った細い声で、しかも断乎とした調子でそれを断わり一般病棟に入れてくれるよう願った。ベネットもしかたなくついにこれを認め彼女はその日のうちにミドルセックス病院一般病棟に入院をした。

けれども、ベネットがはじめに心配した通りのことが幾日もたないうちに明らかになった。何人も患者が入院していて、人の出入りの激しい一般病棟が衰弱しきった彼女の身体に耐えられないのは当り前であった。「コトツ」と小さな音がするだけで、彼女は苦しうに顔をゆがめるほどだった。ベネットはすぐに転室命令を出し、彼女を個室病棟に移すようはかったが、ウェーユはなかなかこれに納得せず、看護婦や医師達をてこずらせた。ついにベネットが一計を策して、「ウェーユさん、あなたは伝染病患者者なのですよ。他人にうつたらどうするのです」としかりつけ、やっと個室に移す始末であったという。生と死との境界をさまよい歩いている苦しい状態の最中であっても、なお彼女は祖国の人々の苦しみを他所にした特別な安らぎを峻拒しないではいらなかったのである。

ウェーユの病気は一向に良くはならなかった。結核そのものは、さほどまでに進んではいけないのである。手を尽しさえすれば完治すること百パーセント疑いなかったのである。だが、彼女は氣胸は無論のこと、医師が処方する一切の特殊な手当を頑として拒んだのだった。なお悪いことには、彼女の半断食状態はここでもまだやまっていなかったのである。看護婦はなんとかしてウェーユに体力を取り返させようと一所懸命に骨を折ったが、相変らず彼女は殆ど何も食べようとはしなかった。食事の時間に看護婦がお盆に載せて食物を枕辺に運ぶと、彼女は黙ったままそれを見ていた。よし

んば彼女が食べたいと思つたところで、彼女の手にフォークとナイフを自由に操ることなどできよう筈もなかった。それ程までに彼女の体力は消耗していたのである。看護婦はそれに気づいて、ちっちゃな子供に食べさせるように、スプーンでウェーユの口許まで運んでやった。時折それを飲み下すこともあつたが、そんな時彼女はとも耐えられない、といったつらそうな顔をした。何か月か前に自分で祈りの文句を創つて、全身麻痺の状態を神に願つた彼女ではあつたが、祖国の人々の苦しみも担^なつてやれずにベッドの上に横たわつたまま、手足の自由がきかず、かえつて看護婦に面倒をかけることには何の超自然的意義も見いだせなかつた。彼女の願つていた全身麻痺とはこんなものではなかつた筈だ。彼女は他人に迷惑をかけている自分がたまらなく悲しかった。時々クロン夫人が見舞にやってくるのがあつたが、そんな時いつでも彼女は「わたしみなさんに御迷惑をおかけしているんじゃないやしません。みなさんの足手まといになっているんじゃないやせんか」と、何度も何度も繰り返して尋ねたということだ。

ある日ウェーユは折から見舞にきていたシモーヌ・ディーツに向かつてこんなことを言い出した。「もしもいつかわたしが昏睡状態に陥るかして完全に自分の意志を剥ぎとられたら、きつとその時こそわたしは洗礼を受けるよう求められているのだわ」と。このことがあつてから幾日もしないうちに、彼女はだれか神父に会つて話してみたい、とディーツに漏らした。そしてディーツのはからいで、つい二、三カ月前にフランスからイギリスに渡ってきたド・ノロワ師の訪問を受けたのである。師はウェーユを初めて見た時の印象をこんな風に述べている。「一目見た時すぐにわたしは、自分の前に横たわっているひとが、神の神秘、人間の運命、キリストの神秘などの問題に真底苦しみながら四つに取り組んでいる、たぐいまれな気高い精神の持ち主だと悟りました」。

けれどもウェーユと師の間の対話は表面上は一方通行に終ってしまったようだ。師は彼女の奇妙でとらえどころのない、師のいわゆる「合理化」の着物を纏った荒唐無稽な論理にほとほと手を焼いたらしい。だから、かれが彼女のためにしてやれることといったら、彼女を訪れて彼女の話し相手になってやるということだけだったのだ。殊にウェーユと師は、洗礼も受けずに死んだいとけない幼子達の魂が閉じ込められているというリンボについて、完全に意見の対立をみた。シモーヌ・ディーツは師の最初の訪問をうけた後、ウェーユが彼女に語った話をこう記録している。「わたし神父さんにこういったのよ。『神父様、わたしこれから洗礼を受けたいと望んでおります。ですけれど、わたしのころは一つのことを考えたとすぐ洗礼に背を向けてしまうのです。それは洗礼をまだ受けないうちに死んでいった幼い子供達が天国から閉め出されているということです。わたしにはとてもそんなことを認めるわけにはまいりません。わたしの考え方、カトリックの教義と違っていないと思うのですが。』するとね、神父さん『とんでもない過ちだ。あなたはお見受けしたところどうも少々傲慢なところがあるようだ』というのよ」。

彼女にしてみればイワン・カラマゾフと同じように、受洗せぬままに苦しんで死んでいった子供達が閉め出されているような天国なら御辞退申し上げようというのであろう。多分、彼女の目蓋の裏側で始終ちらついていた、飢え苦しむフランスの子供達のこと、頭の中にあつたのかも知れない。そういった子供達の魂のあるものが天国にはいれずにリンボで留めおかれているというのに、自分だけさつさと天国の門をたたいて中に入れてもらおう、そんなことがどうしてできるだろうか。ウェーユはそう考えたのだろうか。ウェーユはシモーヌ・ディーツに絶筆ともいえる小論を託している（これは今日『神の愛についての雑感』 *Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu* Paris, N.R.F., Gallimard

1963)の巻末に所載されている。それがいつ書かれたかははっきりしていないけれども、筆蹟の力強さからして病院に入院する以前のことであろうという察しだけはつく。そこで彼女は「わたしは神を信じる。聖三位一体の教えも信ずる。受肉の秘儀も、贖罪も、福音書の教えも全て信ずる」と記し、その後で「わたしは今日までどんな司祭にもけつてあらたまつて受洗を願ひ出たことはなかった。そして今もまた願ひはすまい」と書いている。このことから彼女が最後まで非キリスト教徒のままで、しかも神を深く信じ、愛しながら死のうと心に決めていたことは明らかである。「信仰とは信じるよう定められた事柄を理性的に容認するといった消極的なものではない。それは愛である。それは神が此の世に御示しになる様々の神秘の底深く宿っている、言葉にはならない完全性にひたと心を寄せ、専心それを愛することである筈だ」彼女はそうも書いている。彼女はだれにも負けないくらい神を愛していた。行住坐臥、一瞬だつて神から顔をそむけたこともない。いつでも全身全霊を尽くして神を信じた。その深い愛に応えて神も慈愛をたれてくれたかもしれない。しかし彼女にはそれにあらずかる気にはなれなかった。その慈愛は自分に下つてはならないのだ。自分よりもずっとずっと前に、その慈愛に温められなければ凍え死んでしまうようなものが此の世には舞っている。慈愛はそんな人にこそ下るべきなのだ。自分はただ神を一心に愛してだけいよう。彼女が教会の門を最後までたたかなかつたのには、幾分そんな風に考えていたからかも知れない。「神は教会が受け入れがたいようなことまでも全て御許しになるに違いない」、彼女のそういった強い確信が敬虔な司祭ド・ノロワ師の目に傲慢さとして映つたのしかたがないことだつたらう。でも、ド・ノロワ師にしても、彼女が心の中では敬虔なキリスト者であることは充分に分かつていたのである。ある時、別れ際に師が司祭としての祝福を与えた折、「彼女は深く修練をつんだ偉大なキリスト者さながらの

敬虔さと熱心さでそれを受けた」ということだ。

彼女の衰弱振りは日を追うごとに一そうひどくなっていた。当然のことである。相変らず彼女は殆ど物を食べようとはしなかったのだから。けれど、そんなに衰弱してもなお、彼女の頭からはまだフランス行きのことが去らなかつたらしい。彼女はクロゾン夫人が見舞に来る度に弱々しい声で「丈夫になったら、わたし今度こそフランスへ戻れるかしら」としきりにきいたと言うことだ。

フォークも持てない程に痩せ細った腕で、彼女はよくアメリカにいる父母に手紙を書いている。だが、その筆蹟は驚く程しつかりしたものだった。手紙の内容にしても、自分の病気については、これっぽっちも触れず、イギリスの面白い習慣や風俗を底抜けに明るい調子で書いている。おまけに彼女は病院に入院していることを隠すためにわざわざ返信のための住所を下宿先のポードランド・ロード三十一番地にしている。このため父母は全くウェーユの病気について知らず、彼女が元気で働いているものとはばかり思っていたようだ。そこへ突然彼女の計報が舞い込むことになるのだ。その時の両親の驚きと悲しみはいかばかりだったろうか。しかも、その計報が届いた二日後に、彼女の書いた最後の手紙が両親の手許に届いたのである。その手紙にもやはり病気のことはいさしもなく書かれておらず、ただ「今ではもういそがしくて、手紙を書くひまもありませんし、書くこともなかなか頭に浮かんできません。これからの手紙はもっと短く、また回数も少なく、不規則になるでしょう……」とだけあった。彼女は自分の苦しみを全て自分の内にしまつて、決して他のものにつらい思いをさせまいとつとめたのである。

相変らず食事拒否、治療拒否などで、あまりウェーユが医師や看護婦をてこずらせるので、ミド

ルセックス病院では彼女の生命に責任が持てなくなつたようだ。そのためベネット医師は自由フランスの当局にやつて来て、ウェーユをどこか他所の病院に移してもらいたいと頼みこんできた。病院では治療を受けたくとも部屋がなく、長い間入院を待たされている患者が沢山いるのだから、そういった人の面倒を先に見なければならぬというのである。

モーリス・シューマン、シモーヌ・ディーツ、クロゾン夫妻等は、そろつてこの病院の要求に反対であつたが、ついにやむなく彼女をセント州アッシュフォードにあるグロウヴナー結核療養所に移すことにした。日頃ウェーユが自然と接することに大きな喜びを感じていたのを憶い出し、この縁につつまれた静かな療養所なら彼女も落ち着いて治療を受けるかもしれないと考えたからである。

療養所はシューマン等の申し込みに対し最初は「ここは労働者ばかりの療養所ですから、ウェーユさんは他の患者と一緒にやつていくことができないでしょう。残念ながら申し込みを認めるわけにはいきません」という返事だった。これは皮肉なことだ。もしも療養所が、彼女こそ知識人という特権を剥ぎとり、労働者と一緒に働くことを生涯願つてやまなかつた、苦しみの人であることを知っていたら、よもやこんな返事はしなかつたらう。

だが、とにかくそれから幾日もしないで、シューマン等の熱心な説得のお蔭でウェーユの入院は許された。そしてウェーユはこれまでどこにゆくにも決して手放さなかつた何冊かの書物、たとえばプラトンの著作、ヴァガヴァッド・ギータ、十字架の聖ヨハネ、その他のキリスト教神秘主義者の著作などを携え、クロゾン夫人に付き添われて二時間ばかりの道のりを車に揺られ、療養所に入院した。

彼女にふりあてられた一〇四号室は二階の見晴らしの良い部屋で、その窓は、イギリスに来てより毎日毎日帰還を望みつつ、ついに果たされなかった祖国フランスに向かって開いていたという。きつとベッドに横たわりながら彼女の目は、窓を通して眺められるやわらかな起伏を描いて遙か地平線の果てまで続いている緑野と低い丘陵の向こうに、かつて自分ガール・テリエの人々と一緒に干し草を積みあげたサン・ジャン・ド・ランドの牧草地や、ぶどう摘みに忙しく働き、あまりの労苦にすでに地獄に堕ちてしまっているのではないかという不思議な気分にと襲われたりしたサン・ジュリアン・ド・ペーローラなるぶどう畑の景色を見つめていたに違いない。そして、さらにその向こうには、いつだったか彼女が聖霊の導きによって連れてゆかれた屋根裏部屋の窓から臨んだ木の足場や、荷下ろししている船を浮かべた川面の景色が此の世のものとも思われない神々しい光の中に髣髴と浮かびあがっていたに相違ない。

療養所入院時の彼女のカルテにはこう記されている。

職業 編集者 (フランス解放国民委員 (C.F.N.I.))

宗教 過度の衰弱のため確認不能

既知最高体重値 未詳

入院時体重状況 担架を必要とする程度に衰弱している

これを見ても彼女の衰弱ぶりがどれ程ひどいものであったかが分かる。

入院時の体温は摂氏三九度近くもあったが、数日後には大分さがり、また脈搏もほぼ正常に戻った。だが病状はいつ悪化し、危篤に陥るかも分からない程重いもので、緊急の際の連絡先が書き留められた。クロゾンの所であった。

療養所もまた前の病院と同じように彼女の食物拒否にてこずらされた。しかも今度は全くなにも食べなくなってしまうていた。そして半ば夢うつつに「どうかわたしの分の食物をフランスの困っている人達に送ってあげて」と言い続けていたという。今ではもう、ともに話をするこすらほとんどできなくなり、一日中うつらうつらしていた。シモーヌ・ディーツが療養所にウエーヌを訪ねた時、彼女は苦しい息の下からきざぎざに、「あなたもわたしも同じように神様の裁ちまわいがいから生じた出来損ないの人間なのね。でももうすぐわたしは二度と裁ち違ひされてこの世に生まれなくなるなどないようになるはずよ……」といったという。ディーツにとってそれが最後の別れの言葉になった。

一九四三年八月二十四日夜十時半、生涯人間の苦しみを背負って歩み続けた一つの魂が神の恩寵の力を得て重力の絆を解かれ、暗い夜空へと吸い込まれるかのようにみまかっていた。時、ウエーヌ三十四歳、短いが苦しみによって研ぎ澄まされた気高い生涯ではあった。

埋葬は八月三十日にアッシュフォード・ニュー・セメタリーで参列者七人に見守られながら静かにとり行なわれた。そこには告別につきもののあのじめついたしめつぼさは微塵もなかったそうだが、病魔に冒され、傷つき、大火傷を負った彼女の肉体を癒してくれたのがやさしい父母であったなら、地上の苦しみによってズタズタに引き裂かれた彼女の魂を癒してくれるのは慈愛深い神である筈だ。彼女の魂は地上から無限に離れていますその神の許へ、「超自然的な愛の苦しみ」という乗物にのって天翔けつていったのだ。涙などさらさら不必要だったに相違ない。

彼女の埋葬許可書には、はっきりと「カトリック教徒」の文字が記されていた。これは一見奇妙なことだ。ベネット医師の話によれば、彼女は、なにか風変わりな宗教的なものを見方を持ってい

るらしかったが、「宗教はなにを信じますか」と尋ねるといつもはっきりと「わたしはなんの宗教も信じません」と言っていたというのに。だが、よく考えてみれば、「カトリック教徒」とあって多少しも不思議ではなかったかもしれない。彼女はキリストを、そしてキリストの十字架上の死の上に築かれた霊的教会を誰よりも愛していた筈だ。彼女が忌み嫌ったのは、地上に聳え立つ教会の大伽藍の石の重さだ。けれど、肉体という邪魔な衣を脱ぎ捨てた今、彼女の魂はその重い冷たい石を通り抜けて、霊的教会の奥殿にぬかざくことが出来たに違いないのだから。巨大な怪獣が一匹として住めない霊の国、彼女はその霊の国の教会の熱烈な信者だったのである。

墓には白に灰色の斑がはいったみかげ石造りの四角い墓石が建てられ、その上に

Simone Weil 3, février, 1909—24, août, 1943

という文字が刻まれた。墓石のまわりには石の重みに耐えながら一叢のさんざしが茂っていた。そしてまた、墓前の地面からは、土の重さから解き放たれたかのように、名も知れぬ草が萌え、一輪の可憐な花を天に向かって開いていたという。

追記

八月二十四日に死んだウェーユの遺体が約一週間近くもたった八月三十日になって埋葬されたのは理由がある。というのはウェーユの死について一つ厄介なことが起こったのである。ウェーユの死が自殺、つまり意図的な飢死ではないかという疑いが生じたのである。死亡証明書には、「肺結核、及び栄養失調による心筋衰弱のための心臓麻痺」とあるが、さらに「故人は精神が昂ぶって

いて食事を摂ろうとせず、そのためわが身を自ら飢え死させたといえる」という言葉が付け加えられている。このため遺体は検死に付されることになった。検死は三日後の八月二十七日、慎重におこなわれた。その結果をアッシュフォードのテューズデイ・エクスプレス紙八月三十一日版は「フランス人教授断食により自殺す」という見出しで一面に掲載している。そして「フランスで同胞が飢え苦しんでいるのを思うと食物など喉を通りません」というウェーユの言葉や、検死官の所見、療養所の医師及び看護婦の証言、さらにはウェーユが前に入院していたミドルセックス病院の医師の意見まで載せ、結論として「検死の結果、幾分の精神錯乱から彼女が自殺したことは間違いない」ことを伝えている。自殺という言葉の響きは、なにか負け犬を連想させて厭だが、このことからウェーユの死が一種の自己犠牲であったことは確かと言えよう。